
K I Z U N A ~ 源平合戦 ~

猪鹿蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K I Z U N A ～源平合戦～

【Nコード】

N 4 0 9 2 Y

【作者名】

猪鹿 蝶

【あらすじ】

牛若丸と弁慶を題材にした創作歴史小説です。牛若丸は女だったという設定で、生まれた時から男として強く生きなければならぬという生涯を強いられています。ある日弁慶と出会い、それによって少しずつ女である自分も取り戻しつつ腕を磨き、沢山の友と出会いながら後に起こる源平合戦の長旅を続けていくというお話。作者は歴史に全くの無頓着です。これも自分なりに調べて書いておりますが、多数真実とは異なる事も書いております。多少ファンタジー要素を取り入れたりもしています。その他、間違いやお見苦し

い所が数多くあるとは思いますが、そこを理解してお読みいただければ幸いです。

プロローグ（前書き）

小説初心者の私ですが、皆様に楽しんでいただける作品を残せれば
と思っております。よろしく願います。

ブログ

日出る園、時代は平安。

天皇や貴族が優雅に和歌を歌い暮遊んでいる裏で、公民が御上に与えられた口分田で収める税の為あくせく農業に明け暮れる日々を強いられていた、そんな時代。

京の町では朝から天皇に仕える官僚達が目まぐるしく動いていたが、そこから少し離れた所では緩やかな時間が過ぎていた。

見渡す限り一点の曇りなく空は清々しい程に晴れ渡っており、眩いばかりの陽が至る所に惜しみなく差し込んでいる。

そんな麗らかな日の午後の事。

場所は鞍馬山の麓南にある鞍馬寺。

そこにあるよく手入れされた小さな庭園には、数匹の鯉達が悠々と泳ぐ小さな池があり、その池の水面に映し出されるのは周りに咲き誇る色とりどりの花々。

それは、鯉達がゆらりと泳ぐとその度きらりと揺れていた。

辺りには大小様々な形の木々が並び立っており、その中でも一際大きく目を引く立派な松の木。

その一番高い部分から元気に飛び立った数匹の白い鳥が、雲一つな

い空の水色と重なって眩しい太陽の光の横でよく映えている。

この場所には、独特の心地好い静けさが漂っている。
此処は、どうやら特別な場所のようであった。

鞍馬寺の敷地内にひっそりと佇む離れの障子は、風通しが良い様い
つも少しだけ開いていた。

その隙間から覗くのは、ピンと背の伸びた一人の青年。
後ろ姿しか見えない小柄な青年だが、その佇まいからも凜とした育
ちの良さが感じ取れた。

「若！牛若！！」

そんな静けさをぶち壊す……、もとい、一変させるような騒然たる
声音に青年の手の動きはピタリと止まる。

「まったく……。落ち着いて書に励む事もできんな……」

青年は溜息交じりにポツリと零すと、声のする方向に目線だけに移
し、今この場所に現れようとしている者を待った。

「牛若！大変だぞ！！」

すると、少しだけ開いていた部屋の障子をピシャンツと勢いよく開く音が響く。

「牛若……！」

そこに現れたのは、青年と同じ位の年の頃で、ツルリと綺麗に頭を丸めた、まだ幼さの残る新米の僧侶の姿。

「一体なんの騒ぎですか、乙若兄さん」

乙若と呼ばれた僧は、此処まで随分と慌てて来たのか、何かを言ううとしているもゼエゼエと息を切らせるばかりで、屈みながら「ゴモ」と口ごもらせている。

「……ふう」

そんな姿を見て青年は再度深く溜息をついた。

「乙若兄さん。何度も言うようですが、今の私の名は遮那王しやなわうですよ」

牛若丸改め遮那王は、乙若の実の弟。

だが、兄である乙若よりも随分と大人びた雰囲気醸している。

「ちょっと、黙れ、牛若。……ハア……ハア。……町から、休まず走って、此処まで来たのだ。……寺の坊主に、こんな酷な事、ないだろう……？」

苦しそうにしている乙若を小さく笑い、首を少しだけ横に向けて言った。

「少し落ち着いてください。毎度ながら騒々し過ぎます。それでも出家した僧なのですか？和尚が見たら泣きますよ。それから、日の光がおつむりに反射してチラチラと目が痛うございます」

綺麗に剃毛された頭の乙若とは正反対に、肩位まで延ばされた黒く艶やかな髪を一本で結わっている若丸は可笑しそうに笑っている。

「お前はいつもいつも俺の頭をバカにしゃがって……」

ムツとした様に口をへの字に曲げた乙若は、懷から何かを探りながらツルリとした頭を片手で隠した。

「これのどこが落ち着ける状況だと言うのだ、牛若！ほら、コレを見ってみろ！」

乙若が慌てて牛若丸に手渡したのは、一枚の書面。

「コレは、なんですか？」

「町で配られていた号外だ。ここ、よく見てみる。お前の事が書いてあるぞ！」

牛若丸は乙若からその一枚の紙を受け取り、指差された部分を暫くの間ジッと見つめていた。

「……ふうーん」

号外とは、その時に起こった真新しい事件を、なるべくでも早く世間に知らせる為の書面である。

そしてそれには、昨日牛若丸が実際に体験した事が事細かに記されていたのだった。

「なになに、『鞍馬寺くらまでうの僧、武蔵坊弁慶と名乗る無法者を退治す』、か。……はは、コレを書いている者は相当ネタに困っていたのでありましよう。まさか、こんな子供の喧嘩なんぞを記事にしようとは……」

牛若丸はやれやれといった面持ちでその号外をズイッと乙若に突っ返した。

「牛若……、それはお前の事であろう？」

恐る恐る訊ねる乙若に、牛若丸は形の良い紅色の唇をゆつくりと弧を描かせ、少女のようにきめ細かな白い肌にパツと彩りを加えた。

「っはは！……なあ、乙若兄さん」

ニツコリと無邪気に笑う牛若丸を、無言のまま不思議そうに見つめる乙若。

「これは、昨日の夜の事かなあ？それとも、その前日の夜の事かなあ？」

さも嬉しそうにそんな事を問う牛若丸を目の前にして、ただただ乙若は言葉を失ってしまうのだった。

「乙若兄さんも知っていたのでしょうか？夜な夜な私が弁慶と決闘し

ていた事くらい」

返事を返す事のできない乙若はゴクリと唾を飲み込んだ。
押し黙る乙若に牛若は話し続ける。

「それに、今更ですよねえ。弁慶と私との事をこのように記事にしようだなんて。だって、初めて奴に会ったのはもう一か月程も前の事です。決闘なんて両手で数えても足りないくらいしていますよ」

世が恐れている武蔵坊弁慶という男との決闘を楽しそうに語る牛若丸を見て、乙若は静かに思う。

同じ血を継ぐ兄弟であろうとも、生まれ持った器というものは全く違うものなのだ、と。

牛若は自分とは計り知れない大きな器を持っている逸材なのだ、と。

そしてこの出来事の発端は、一月程前に遡る。

第一話 牛若と乙若（前書き）

二人の生い立と鞍馬寺に来るまでの過去のお話を少しだけ。
年齢付け足しました。

第一話 牛若と乙若

父は河内源氏の武將を務めた源義朝。

母は九条院に仕える雑士女ぞうしめだった常盤御前とぎわごぜん。

二人の間には三人の男児が生まれ、義朝にとっては末っ子で九男にあたるのが牛若丸なのであった。

牛若丸は、母に似て大層な美形に生まれる。

母常盤も元より町で有名な絶世の美女であり、そこを買われて義朝の妾となったのだ。

そんな常盤の血をしつかりと受け継いだ牛若丸は、小さく華奢な身の丈に白く陶器のような柔肌を持ち合わせ、その様は誰もが少女と見紛う程だった。

だが、本人は女のような自分の容姿をあまり好いてはおらず、「男らしい男になりたい」と幼い頃から毎日剣術や武術に励んでいた。そのおかげもあってか、物心つく頃にはその腕前はかなりのモノであつた。

牛若丸が母と別れこの鞍馬寺くらまでうに来る事になったのは、もう随分と前の話。

そして、牛若丸が母の元を離れる事になったのはまだ二歳の頃だった。

平治の乱で父を亡くした後、兄である七男の今若と八男の乙若と共に常盤の胸に抱かれ都を離れる事になった牛若丸。

大和国に逃れた母常盤はその後すぐに都に戻らねばならなかった。まだ幼かった三兄弟は、幼くして母と離れ離れに暮らす事を強いられたのだ。

今若は醍醐寺で出家する事が決まっております、そこに乙若と牛若も稚児として預けられる事となる。

暫くは三人一緒に暮らしていたのだが、牛若丸が十になろうかという頃に京の鞍馬寺くらまでらに稚児として移される事が決定する。

気性の荒い七男の今若とは真逆の性格であつた乙若は、弟牛若を常日頃から大層気にかけていた。

その為、年端もゆかぬ牛若丸一人を移す事が気が気でならなかつたのだ。

そこで乙若は、牛若丸が自分に懐いていた事を鞍馬寺の和尚に訴え自らも出家すると志願し、二人揃つて鞍馬寺くらまでらに預けられる事と相成つたのである。

それももう、数年も前になる。

そしてこれは、まだ二人が鞍馬寺に預けられる前の事。

「乙若兄さん。それ、一体いつまで続くんですか？」

大和国で預けられていた寺の拝殿で座禅を続ける十一歳の乙若に、まだ八歳になつたばかりの牛若丸はくりんと首を傾げた。

「……この園が平和になるまで」

瞑想したままボソリと返す乙若に、それっていつ、と不満そうに深い溜息を漏らす牛若。

暫くその様を頬杖をつきながらボーッと眺めていたのだが、すぐに飽きて立ち上がった。

「あーあ。暇だなあ。今若兄さんも毎日のようにどこかに出掛けちゃうし」

それもそのはず。

その寺には現在、八十過ぎの和尚と歳を取った僧侶しかおらず、子供は今若と乙若と牛若丸しかない。

「お前も横でお経でも読んでいればいい。俺達は出家するんだから、今からでもできる事を探して和尚に恩返ししないとな」

「出家するのはいいけど、私は兄さん達みたいにツルっぱげになるのは勘弁です」

「ツルっ……?!」

「ほら、この様になってしまっただけは冬が寒くて仕方ないじゃないですか」

綺麗に剃毛された乙若の頭をペタペタと触り、不満そうな牛若。その感触に思わず目を見開いた乙若は、瞬時に牛若の手を取ろうと自らの手を頭上に伸ばした。

「牛若！お前、今俺の頭バカにしただろ！」

怒りを露わにした乙若であつたが、それをいとも容易くヒョイッと避けた牛若丸。

「まったく！これはなあ、後に出家する為の俺なりの決意なんだ！お前はいつまでたつてもそんなだから……」

言いかけた乙若だったが、尚も不満そうに背を向けゆつくりと歩き出す牛若を見て言葉を濁した。

「だって……、強くないと自分も家族も守れないじゃないか。私は嫌なんです、これ以上大切な人と離れ離れになるのは……」

「牛若……」

「それに、兄さん達が私のお相手をできないと言つのなら、今日もまたその柿の木しか相手はいないではないですか……」

いじけたように、ぷう、と頬を膨らませた牛若丸は、縁側に準備していたボロボロの二本の木刀を両の手に握りしめ、ドサツとそこに腰かけた。

そして足をブラブラとぶらつかせながら、傷だらけになった庭の柿の木を眺めている。

そんなまだまだ幼い牛若を、やれやれといった面持ちで見つめる乙若。

「出家した後も好き勝手してる今若兄はともかくとして。いつも相手できなくてすまないな、牛若。ああそうだ、今の名は牛若ではなく遮那王しやなおうであつたな」

機嫌を取るように乙若が明るくそう言うと、牛若丸は造園を見つめたまま小さく返した。

「……牛若。で、いいです」

「?……なんでだ? 遮那王しやなおうはイヤか?」

「牛若が、いいんです」

「カッコイイ名じゃないか、遮那王しやなおう。まるで名のある武将のようだぞ」

急に元氣のなくなった様子の牛若に、乙若は心配そうな視線を背に送りながら明るく振る舞う。

「……父上と母上」

「え？」

ポツリと牛若が漏らした久方ぶりに耳にする言葉に、乙若もピタリと動きが止まる。

「牛若丸という名は、父上と母上から初めてもらった最後のものだから……」

そう言つて静かに牛若丸は俯いた。

父、義朝は牛若が大和国に移った二歳の頃、平治の乱で敗北後、道中で家人に裏切られ謀殺されたのだった。

だから牛若は父の顔もどんな人物であつたかもほとんど覚えてはいない。

生きてはいるが、母である常盤も同じ。

ほとんど共に生活した事のない常盤の事も、ほとんど何も知らないのである。

その様子を、小さな溜息をつきながらもフツと優しい笑顔を浮かべ見守る乙若。

「そうだな。俺も、乙若という名が大好きだぞ」

父と母の元を離れこの寺に来るまで、牛若が二人の名を口にしたのは数回程しかない。

それはまだ幼い牛若にとって自然な事ではなく、故意に二人の名を口にしないようにしていた事が伺えた。

「じゃあ、こうしよう牛若。俺達兄弟の間では、お前の名は何時何時でも牛若丸だ。今若兄だって、隆超なんて呼ばなくていい。俺達が互いを呼び合う時は、誰が名付け変えようと必ず幼名で呼び合うのだ。だから俺達と一緒にいる間は、何処にいても幾つになってもお前は牛若のまま。勿論、俺達も俺達のままだ。俺らの間ではいつまでも今若と乙若と牛若だぞ」

どうだ名案だろう、と乙若が誇らしげに牛若に説いた。

「……でもそれ。今までと何にも変わってないですね」

「ん？……んん」

確かにそうだ。

この寺でも前に住んでいた場所でも、兄二人は牛若を「遮那王^{しやなおう}」ではなく「牛若」。

牛若と今若も乙若を「乙若」「乙若兄さん」。

今若の事も二人は「隆超」ではなく幼名の「今若兄」「今若兄さん」で呼んでいる。

今も昔も、改名した後も幼名で呼び合っている牛若ら兄弟にとっては、何一つ変わっていないのだった。

「ま、まあ。そ、それもそうだが……」

途端、分が悪そうにどもる乙若だったが、牛若はその声にクスッと一笑する。

「わ、笑ったな牛若！今、笑っただろ！」

「笑ってないですよ」

「ち、違うぞ！そうだ、アレだ！俺達はいつまで経っても変わらないうって意味で言っただんだ！」

「そうですね、わかっています。クスクス……乙若兄さんはすぐムキになるんだから」

「ムキになぞなつてない！」

「ほら、また。だから剣術でも武術でも私に敵わなくなるんですよ」

「な、なにに？」

牛若はピョンツと縁側から降り、悪戯な笑顔で振りむいた。

「知ってるんですからね、私に敵わなくなったから武の修業をしなくなっただけの事」

まさに図星とでも言うように、乙若はスックと立ち上がって大きな身振り手振りを付けながら弁解し始める。

「べべべ別に、敵わない事なんかない！ただ、最近は少し体調子が悪いんだ、だからだ！今朝だって少し関節が痛んでた……」

ふーん、と口角を上げながら聞いている牛若丸をキツと睨み付け、またどっかりと座禅を組んで瞑想を始めてしまった乙若。

「それはともかくとして！俺はもう少しで悟れそうな気がするのだ。だから、お前には悪いが、しばらくはその辺で遊んでおってくれ。それと、もう一つ。牛若もここで出家するかもしれぬのだから、今からでもきちんとしておいた方がよいぞ」

フンツと鼻息を荒くして瞑想し始める乙若に、牛若丸は呆れたように吐き捨てた。

「その様に数日で仏教が悟れるのであれば、そこらじゅう寺で溢れ返ってしまいます。ですから、悟りも程々をお願いしたいものです
ね」

何も返事をしない乙若にベーツと舌を出した牛若丸は、手にしていた木刀をカランと地面に投げ捨てた。
そしてすぐさま懷から綺麗な漆塗りの横笛を取り出し、その場で徐に吹き始めた。

牛若の奏でる笛の音は、それはそれは見事な程に美しい音色で、美しい庭の景色と自然に馴染んだ。
牛若は昔からこうしてよく歩きながら笛を吹いており、それを町行く者が耳にすれば誰もが足を止める程であった。

生まれた時から共に過ごしている乙若は、もちろんその音は聞き慣れてはいたのだが、何度聞いても心地の好いその音色が実は大層気に入っていた。

「暗くなる前に戻るのだぞ。お前の身なりは一見して男児にも女児にも見えるのだから……」

その場から遠くなる音色に心配になりつつも、目を開ける事なく牛若に何かを告げようとしていたのだが、牛若丸はそれに返事を返す事もなく笛を吹き続けたまま町へと消えて行った。

「やれやれ……。まったく。牛若にも段々と敵わなくなってきたなあ。……色々と」

様々な思いを胸にそっと目を開けた乙若は、視界から消えゆく牛若丸の背を眺め、また小さく溜息を漏らした。

「このまま何事もなく平和に暮らしていければ、いつかは牛若も本当の姿に戻り普通の女として生活できる日が来るのかもしれないあ……」

誰もいない拝殿で一人、誰にかけるわけでもない言葉をまた呟いた。

そう。

牛若丸は、女だったのだ。

ただしこれは、父である義朝と母である常盤、そしてその兄弟の今

若と乙若しか知らない事実。

「きっと、女として暮らせる事こそが牛若にとっても幸せなはずだ。
俺は、願わくばそうあつて欲しい」

そんな牛若を一番に気にかけている乙若は、心からの願いをそう口
にすると、ゆつくりとまた囿の平和を想い深い瞑想に意識を持って
いくのだった。

第二話 出会いは必然（前書き）

牛若丸と弁慶が出会う前日の出来事。
付け足し 牛若の年齢修正しました。

第二話 出会いは必然

濃い紫色に染まった空のそこそこに散らばる、大小異なる光る白い宝石達。

昼間の目まぐるしい程の活気を忘れたかの様に、シンと町は静まり返っていた。

家々からは今晚のおかずであろう魚を焼く芳ばしい香りや、家族の楽しそうな笑い声が零れている。

「今日の夜空は、随分と綺麗だなあ」

そんな静寂に満ちた夜の京の町を、カラカラと下駄の乾いた音を鳴らしながらゆらりと歩く少年。

その男は、十四歳になった牛若丸であった。

「こうして毎日歩いていると、京の町がいかに平和なのかが手に取るようにわかる」

牛若丸は嬉しそうに周りを見渡し、薄紫色の品の良い扇子を開いたり閉じたりして遊んでいる。

すると、そこをたまたま牛若丸と同年代位の三人の若い雑士女達が通りがかった。

「見て、あそこ。遮那王様よ」

牛若丸の姿を見つけるなりきやあきやあと黄色く騒ぎ出す。

「馬鹿ね、牛若丸様はその名前で呼ばれるのはお嫌いな」

「お会いできるなんて嬉しい」

「今日も素敵ね、牛若様」

牛若丸はその端正な顔立ちからか、京の若い女達に大層な人気があった。

まだまだ若いし身丈も小さいが、大の男よりも腕が立つし、荒々しい態度の武将達に比べて紳士的で女子供に滅法優しい。

その上如何なる時にでも機転の利く頭の回転の良さも合わせ持っているものだから、それは当然の事であった。

しいて一つ問題があるとすれば、牛若が実は女だという点。

この女達にとってそれは大きな問題ではあるが、勿論女達はそれを知る由もない。

それを知る者は亡くなってしまった父を除いて、兄である乙若と今若、そして母親の常盤御前のみ。

その他の者は、町の者も勿論皆今まで関わってきた者達も牛若を男だと思っているし、牛若もそのように振る舞っている。

だから、目の前の女達が牛若を一人の男として見ているのは至極当然の事なのだった。

「牛若様、今日も夜分にお散歩ですか？」

雑士女の一人が少し遠目から牛若丸に声をかけると、残りの二人は、ずるい、だの、私も、だの騒ぎ出す。

「ああ、こんばんわ。今日は夜風が気持ち良いですからね。見回りがてらに歩いていました。貴方達も、こんな夜分にお使いですか？」

「ええ、これから文をお届けに参りますの」

「へえ、こんな時間に文ですか。大変ですね。もう外は暗いというのに」

「そうなんです。ですから本日は特別雑士三人での遣いを頼まれまして」

「成る程、御上のお遣いですか。……して、何かあったのですか？」

「……………」

そんな他愛のないはずの会話に一瞬の沈黙が流れ、雑士女達はソワソワとし始める。

「あゝ……、ええつと」

女達のその気まずそうな態度が、何かあったのか、という自分の問いについての答えなのだとすぐにわかった牛若丸は、持っていた扇子でポンポンとリズムを取りながら言った。

「言いくい事でしたら無理におっしゃらなくても結構ですよ。御

上にも色々とありましようからね」

「い、いえ。言いにくいというか……」

優しく微笑む牛若丸に、女達は更に気まずそうに俯いて言葉を濁す。その様を見て、牛若は申し訳なさそうに深く頭こづかを垂れた。

「私の方こそ貴方達を困らせてしまったようで、なんだかすみませ
ん」

「め、滅相もございません牛若丸様！」

「どうかお顔を上げてください！」

「牛若丸様は何も悪くありません！」

雑士女達はアワアワと弁解し始める。

「私達はただ、ここ最近この近辺で起こっているおぞましい事件について、詳しい情報をまとめて御上に報告する為の書面を届ける途中だったのです」

一人の女が早口で言い終えた後で、しまった、という顔をした。

「……おぞましい、事件？」

こんな平和な町にそんな事件なんてあったらどうか、と牛若丸は首を傾げる。

「あ、あのですね、実は……」

「この近辺で最近、武蔵坊弁慶と名乗る悪漢が現れまして……」

「その輩が、京で千本の帯刀を奪うと豪語し至る所を練り歩いているようで……」

おずおずと女達が事の経緯を説明をし始める。

すると、牛若丸はズイツと女達に近づいて顎に手を当てながら興味津々に耳を傾けた。

「ほお、千本ねえ。……それで？」

「え、ええ……。その弁慶という男は道行く人を襲い、通りがかった武者と決闘して帯刀を奪っているのだそうです」

「ただ、これはまだ町の者には知らせないという御触れです……」

「万が一、その話を耳にした町の者達がパニックを起こしたらいけないという事で……」

「ふうん、成る程ねえ」

牛若丸は女達の言う弁慶という存在に一切怖がる様子もなく、むしろまだ見ぬ友の話を聞くかの如く無邪気な笑顔で聞いていた。

「ですから、牛若様も夜道には十分お気を付けください……」

「で、果たしてその弁慶とやら。今一体何本集めたんだろうか？」

「……え？」

女が気遣いの言葉を言い終える前に、牛若丸はそんな意表をついた質問を投げかけた。

そしてその結果。

三人の雑士女達は、ポカンとして呆気にとられたまま立ち尽くしている。

「まだ数本程度ならいいが、もし数十本、数百本の帯刀をすでに集めているとすれば、一体それらをどうやって持ち歩いているのだろうか。はてさて、それらを一つに束ねて担ぐのか。それとも引きずるのか。……いや、何かに乗せて運んでいるという線も考えられるなあ」

うーん、と腕組みをしながら考え込む牛若丸。

目の前の秀麗な男が周りの男達とは色々な面で少し違っている事は前々から雑士女達も重々わかってはいたが、まさかこの話を聞いて怖気づくのではなく逆に目を輝かせるだなんて思いもよらなんだ。

そんな牛若丸を、目を点にした状態で見つめている三人の雑士女達。

「ねえ。貴方達も、気になりませんか？」

「え、ええ??」

「ほら、弁慶がどうやって千本近くの刀を持ち歩いているのか。貴方達だって気になっているでしょ?」

ねえ、と不意に向けられた牛若丸の笑顔に、つい一人の女の頬がみるみる紅色に染まってしまふ。

「……え、ええ。まあ。気になりますよね、やっぱり」

すると、隣にいたもう一人の女がグイッと袖を引っ張った。

「あ、あのお！私達、そろそろ行かなければならないんです！」
「そ、そうそう！早くこの文を届けないと。ね？！」

「あ、ああ！そ、そうよね」

もう一人も慌てた様にその女の袖を引っ張ると、頬を赤らめていた女も我に返ったようだった。

「すまない、貴方達の仕事の邪魔をしてしまいましたね」

「いえいえ、とんでもない。いいんですよ、牛若様」

「牛若丸様とは、是非またお会いしたいですもの」

「……あ、あの！」

先程まで頬を赤らめていた女が、唐突に大きな声をあげた。

「……でも牛若様、……くれぐれも武蔵坊弁慶にはお気を付けください」

最後に一人の女がそう告げると、三人は肩を寄せ合い一礼し、いそいそとその場を後にしたのだった。

「お気を付けください……、か」

女達の後ろ姿を最後まで見届けると、牛若丸はポツリと呟いた。

「……クス。武蔵坊弁慶、なんだか面白そうな奴が現れたなあ」

* * * * *

その頃。

京の町のある一角では。

「これで九百九十九本目、つと」

月夜に照らされ影として地に映るは、身の丈以上もあるなぎなた薙刀を持つ大男。

「はあー……。京の町中には強え武将らがわんさかいるんじゃないかと思って来てみれば……。こりゃあとんだ見当違いだったようだ

なあ」

残念そうに深い溜息をつく大男は、まるで木の枝を振るかのように長く大きな薙刀をブンと軽く振り払う。

すると、鋭い薙刀の切っ先からは先程切った武将の鮮血がそこら中に飛び散った。

「っひ……！」

するとたまたま近くを通りかかった町の者がそれを目の当たりにして、恐れをなしたように引け越しのまま駆け去ってゆく。

無理もないだろう、この光景を目にしてしまつては。

地面には音もなく横たわる切られた武将と、月に照らされ不気味に輝く夥しい程の紅血。おびただ

そしてその傍には返り血を浴びて微笑む鬼のような大男が立っているのだから。

「武者と決闘して帯刀を千本奪うつてのも、我ながら面白い案だと思つたのだからなあ。いかんせん、思っていたより全然時間もかからなかったぜ。あーあ、次は何をして暇を潰してやろうか。今から考えておかなきゃならんな」

そう言つてニヤリと笑う男は、最近巷で有名な武蔵坊弁慶、本人である。

その素顔は歪んだ笑みを浮かべた口元しか見えず、頭からは大きな

白い布を被っていた。

その上顔の大半は鬼のような恐ろしい形相の真つ赤な面を付けていて、素顔は一切わからない。

背丈もパツと見で大分大きいというのはわかるのだが、実際の体格が如何程いかほどなのが全く見当もつかない程無骨な防具を乱暴に身に纏っている。

ただ背には沢山の長い武器を携えており、それらを軽々と担いでいる処からしても弁慶がかなりの大力無双だという事だけはしっかりと見て取れた。

弁慶は手に持っていた薙刀を背に背負っていた沢山の武器と共に再度背負うと、先程倒した武将の手から軽やかに帯刀を拾い上げる。

「いよつし。決ゝめたつと」

すぐそこに置いてあった、一本の縄で結わえられた数百本の刀の束。そこに倒した武将の帯刀をグイッと押し込んだ弁慶は、星空を眺めながら言った。

「明日は川魚が食いてえ。だから川沿いを歩きながら武将を探して、晩は近くの橋の下で宿を取るとしよう。で、晩飯はそこで釣った魚をツマミに千本達成を祝って酒を呑むぞ。川を眺めながら次のお遊びを考えるんだ。うゝん、我ながらナイスなアイデアだな」

ガハハと満足そうに笑うと、刀の塊を軽々しそうに肩に担いでガシヤンガシヤンと人が歩いているとは思えないような騒々しい擬音を立てながら闇夜に消えて行くのだった。

* * * * *

同じ刻。

「 武蔵坊弁慶か。会ってみたいなあ……」

その夜牛若丸は、弁慶と同じ綺麗な星空を見上げながら、それは嬉しそうに笑っていたのだった。

まだ見ぬ友の姿を想像して。

第三話 運命は偶然

鞍馬寺で飼っている養鶏の烏骨鶏は元気に鳴き始め、辺りは薄らと明るくなり始めていた。

早朝、というよりは、まだ夜明け前といった雰囲気、当たりはシンとした静けさが漂っている。

「……うん」

そんな頃、寝ぼけ眼でムクリと目を覚ましたのは乙若であった。

まだ閉じたままの目を擦り横を見ると、隣で寝ていたはずの牛若丸の姿はすでになく、布団は綺麗に片付けられている。

その日はたまたま離れの自分の部屋ではなく、乙若の横で寝た牛若丸。

「……なんだ、牛若今日はやけに早いな」

まだ開き切っていない眼を擦りながら自分の布団を片し身支度を整えると、いつもよりも少し早めに僧達が集まる本堂へと向かった。

「ん？」

すると、どこからか聞こえてくる、心地の好い笛の音色。

「……牛若？」

まだ姿の見えない牛若の名を小さく呼びながら、聞き慣れた美しい笛の音が聞こえる方へと足を運んでゆく。

すると本堂に向かう途中、そのから見渡せる小さな庭に牛若丸の姿を見つけた。

牛若丸は池の横にある型のいい石の上に片膝を立てて座っていて、縁側に立つ乙若に気が付かないまま、瞳を閉じて気持ち良さそうに笛を吹き続けている。

月の淡い光に照らされた池の水面は、まだ薄暗い辺りにキラキラと優しい輝きを発し、その傍らに凜と佇む牛若丸の風姿。その佇まいは、兄弟から見ても大変美しく神秘的に映った。

「これはなんとも……」

美しい、と続けるはずであった言葉を恥ずかしさから飲み込んだ乙若は、最近久しく牛若の笛の音は聞いていなかったという事に気が付いた。

久方ぶりに聞いたその美しい旋律に、乙若は暫くの間ぼうつとその美しい情景と牛若丸の笛の音に目と耳を奪われたのだった。

「…………あれ、乙若兄さん？」

少しして乙若の存在に気が付いた牛若は、笛を吹くのを止め視線を乙若に向けた。

「どうしたんだ、牛若。こんな朝早くから随分とご機嫌じゃないか」
廊下の柱に寄りかかっていた乙若は、嬉しそうな牛若を見て優しく微笑んだ。

「ははは、ご機嫌に見えましたか？やっぱり、乙若兄さんはなんでもお見通しなんだなあ」

「当然。お前がまだこーんなに小さかった頃から一緒にいるんだ、わからない事があるわけないだろう。……して、今日は何か特別な日であつたか？」

春になったとは言え、日が昇る前はまだまだ冷え込んでいる。
薄手の着物一枚の乙若は、ブルルと身震いしながら牛若に問うた。

「いいえ、今日も特に何もありません。平凡でいつも通りの一日の始まりでございますよ」

「…………？そうか」

あまりにも屈託のない牛若の笑顔に少しだけ違和感を感じた乙若で

はあったが、それに対して特に何も触れなかった。

そしてそれは、非凡で非日常的な長い一日の始まりであった。

* * * * *

「な、なんだアレは……」

「しっ！アンタ、あんまりジロジロ見るんじゃないよ」

町の者達は、あまりにもそこに不釣り合いな大男を見てヒソヒソと噂話をしていた。

「強そうな奴、いねえなあ」

そんな人々には一切目もくれず、一人そうぼやいているのは、真つ赤な鬼の面を被り、背には沢山の長手、肩には大量の刀を背負った、歩く度になんとも騒々しい音を鳴らす武蔵坊弁慶である。

「ありやあうつけ者か？ほれ、春になるとんと増えるとかいうだろっ」

「馬鹿、うつけ者があんな夥しい数の帯刀を持つてるかよ」

「うつけはうつけでも、きつとどこぞの野盗か武将だろうっ」

「じゃあ、あの沢山の刀は一体……」

「まさか……」

異形過ぎるその弁慶の出で立ちに、町行く人達は口々に好きな事を言い合い皆避けて通った。

「はあー、つまんねえなあ。すれ違う奴らは誰一人俺に近寄ろうともしねえし。ってまあ、こんな身なりしてんだから仕方ねえか」

ハハハと一人高笑いしている様を見て、それを見ていた町人達はまた眉を顰めた。

「もう日も暮れるなあ……今日は不発かな」

残念そうに空を仰ぎ見る弁慶。

時刻はすでに夕刻を過ぎており、あかね色に染まった空は徐々に薄暗くなり始めていた。

「この分じゃあすぐに暗くなっちまって足元も見えやしねえ。腑に落ちねえが、お天道様の事だもんな。こればかりはしょうがねえ」

ちょうど五条大橋を渡る手前であった弁慶は、川原の土手に降りて大量の刀と数本の自分の武器を地面に下ろし一息ついた。

「残念だが、祝い酒は明日までお預けだな。やっぱ酒は千本達成した暁に呑みたいし、その方が格別に美味い。て事で、今日は川魚だけで我慢するぞ」

そう言つて、束ねられていた長い武器の中に潜ませていた愛用の釣竿を取り出し、鬼の面を付けたまま近くの土手で釣り糸を垂らすと、どっかりとその場に胡坐をかいた。

恐ろしい形相の真つ赤な鬼の面を被る大男が、橋の下で夜釣り。これはあまりにも異形で滑稽な様ではあったのだが、弁慶は寝る時ですらその面を外す事はなかったのだ。自ら武蔵坊弁慶と名乗るようになった、その時から。

そして、それからどのくらい経つたであろうか。

随分と歩いて長旅を続けていた弁慶は、魚がかかるまでの間ウトウトとしていた。

餌もつけていない釣り針にはなかなか川魚は引つかからず、今だ一匹も釣れていない状態の弁慶。

このままでは今日の晩飯にはありつけない。

「ていうか俺、今まで川で魚釣れた試しねえんだった」

なんとも気付くのが遅い弁慶。

それはそうと、川釣りは素人が考えている以上にとても難しく、そう簡単にひよいひよいと釣れるものではないのだった。

「なんだよ。京の町ってのは、どこまでも俺に冷てえんだなあ」

ちえつと舌打ちをして釣竿を地面に放り投げた弁慶は、その場にゴロリと仰向けになって眠ってしまおうと瞳を閉じる。

「……ん？」

すると、どこからともなく聞こえてきた音紋にパチツと目を開けた。

「……これは、笛の音？こんな時間にガキでもうるついてんのか」

寝転がったままの状態で特に何の反応も示す事無く、全く興味なさそうに呟いてまた瞳を閉じる。

が、段々と大きくなっていくあまりにも美しいその旋律に、普段は音楽など耳にする事がない弁慶も、気が付くとウツトリと聞き惚れてしまっていた。

「こりゃあガキじゃねえな。この曲、一体どんな人物が奏でてるんだ……？」

つい気になってしまった弁慶は半身を起し、すぐそこで聞こえていた音の根源を目で探した。

そして、その根源を見つけるや否や、またもウツトリと見惚れてしまふ。

「アイツあ……、男……だよな？」

見上げた先の橋の上には、たまたま通りかかった青年が笛を吹きながらゆつくりと歩いていた。

青年は烏の濡れ羽色をした髪を高い位置で結い上げ、白色から裾部分が紫色の諧調に染められた濃淡の着物を身に纏い、端正な顔立ちに少女の様な白い肌をしている。

「男にしとくによあ随分と勿体ねえ」

その名も、牛若丸その人である。

そのあまりにも美しい牛若丸の風貌に、弁慶は眩きながらも息を飲んだ。

「ん？」

本当であれば、牛若丸は何事もなくそのまま弁慶の目の前を通り過

ぎて行くだけの間柄である筈だった。

「おい、待て待て。ありゃあ俺の目の錯覚か？」

ゴシゴシと両の目を擦る弁慶。

交わるはずのなかった二人は、牛若丸が腰に携えていた物をきっか
けに事が一変する。

「……つくつく、驚いた。あんなクソガキ風情が、随分と身の程に
似合わねえモン持ち歩いてんじゃねえの」

鬼の面の下から除く弁慶の口元は、ゆつくりと邪に満ちる歪んだ笑
みを浮かべる。

「決めた。アレは俺が貰う」

そしてグツと地を蹴って勢いよく起き上がると、地面に置いていた
武器一式と集めた九百九十九本の帯刀を軽々しそうに持ち、急ぐ気
持ちを抑えながら五条大橋の上に足を運ぶ弁慶であった。

そんな悪意に満ちた視線には気付かずに、牛若丸は颯爽と夜空の下
で笛を吹き続けている。

どこまでも悠々としているその音色は、そんな正反対な性質の二人
の出会いを祝福するかのように辺りを丸く包み込んでいた。

第四話 今日の敵（前書き）

付け足し 弁慶の年齢修正しました。

第四話 今日の敵

とつぷりと夜の帳を落とした上天の下。

そこにはガシヤガシヤと騒々しい音を立てる者と、美しい笛の音を奏でる者が五条大橋の上にいた。

「おい、そこのお前」

弁慶の低く通る声に笛の音をピタリと止めた牛若丸は、丁度橋の真ん中辺りで背を向けたまま立ち止まる。

「お前、ガキのくせして大層なモン持ち歩いてんなあ」

その言葉にくるりと振り返る牛若丸。

間近で見るとまた随分と綺麗な牛若丸の顔立ちに、弁慶は不覚にも一瞬たじろいでしまう。

「ああ、コレですか？」

パツと花を咲かせたように無邪気に笑った牛若丸は、弁慶の異形な出で立ちに驚く事もなく、先程吹いていた漆塗りの横笛を嬉しそうに弁慶に向けて見せた。

「コレ、綺麗でしょう？これは昔人から頂いた物で、名のある職人から作ってもらった特注品なんだとか。……あ、もしかして貴方も得意で？」

そう言つて笛を吹く素振りをしてみせる牛若丸。

「違いーよ、阿呆。俺が言つてんのは、んな笛の事なんかじゃねえ」
弁慶は呆れたように溜息をついた。

「ソレだよ、ソレ。お前が腰にぶら下げてる、ソ・レ！」

指を差している先を見ると、どうやら弁慶は牛若丸の腰に携えていた帯刀の事を言っているようであった。

「……ああ、コッチの事でしたか。これも遠い昔に身内から頂いた物で、まあ、形見とでも言いましょうか。でも使った事は殆ど……」

と、腰の刀について説明している途中、あ、と何かに気が付いたように牛若丸は動きを止めた。

「もしかして。貴方が噂に聞く、武蔵坊弁慶とかいう暴君だったりします？」

「はあ？」

牛若の問いにあからさまに不機嫌になる弁慶。

「……なんで俺の名を知ってんだ、てめえ」

明らかに一触即発な状態にも関わらず、牛若の表情は噂の不貞の輩である武蔵坊弁慶を目の当たりにしても恐れるとは全く真逆の反応を示していた。

嬉しそうなその笑顔は、まるで出会えた事を喜んでいるかのようにさえ見える。

自分の尋常でない風骨を目の当たりにしてそのような反応を見せる者と出会ったのは、今まで生きてきて生まれて初めての事であった弁慶。

驚きはしたが、すぐにそれを挑発であると受け取った。

「ふーん……。いい度胸してんな、てめえ。しかも俺に面と向かって暴君だど？っははは！とんだ褒め言葉言ってくれるじゃねえか。嬉しい限りだ」

そして弁慶も、そんな牛若丸を目の前に嬉しそうに笑った。

「いやあ、私もです。本当に嬉しいなあ」

「は？」

「私、昨日貴方のお話を耳にして、是非ともお会いしたいと思っていたところなんですよ」

ビビらせようと言っている言葉にも一切臆する事のない牛若丸。コイツは今までの奴らとは違う、そう感じた弁慶であった。

「……そうか。俺もだ」

束になった刀と沢山の武器を橋の袂にドンつと投げ置いた弁慶。

「まあ、俺はお前というよりも、お前のその帯刀に出会えた事に、だがな」

そう続けて代わりに手にしたのは、愛用している一本の大薙刀。

「へえ、それが武蔵坊弁慶の武器というわけですかあ。ふむふむ、随分と長く立派な薙刀ですねえ」

これから弁慶がしようとしている事とは裏腹に、牛若丸が笛の代わりに胸元からパンツと勢いよく取り出したのは、対抗する為の武器ではなく、いつも持ち歩いているお気に入りの薄紫色の扇。

「そうして束ねて数多くの刀を持ち運んでいるのですねえ。いやはや、驚く程の怪力。して、一体その薙刀で今まで何本の帯刀を手に入れたのです？」

山積みになされている刀を扇で指し示しながら、興味津々な面持ちで弁慶に問うた。

その堂々たる態度に弁慶も意表を突かれたのか、少し白けた様に間抜けな声を出してしまう。

「お前、変わってんなあ。めでたい奴、っていうかなんていうか……。俺と対峙する間にそんな事聞かれた事なんて今までなかったぞ。俺の事、コワくねえのかよ？」

そう言いながら、静かに薙刀の鋭い切っ先を牛若丸に向ける。
月の明かりに照らされて、刃は鈍く瞬いた。

「それとも、……本当にただの阿呆なのか？」

ニヤリと笑ったかと思うと、物凄い勢いで七尺程離れた先に立つ牛若に向かって大きく薙刀を横に振り払った弁慶。
その勢いで牛若丸の小さな体は宙にまい上がり、ボシャンッと池に落ちる音がシンと静まり返る辺りに響いた。

それは、瞬きする間もない位に一瞬の出来事。

殺^やった、と弁慶は思った。

「これで、千本目……か」

とはいえいくら巷で暴君と呼ばれている弁慶とあっても、自分よりも小さな子供を斬るだなんて気が引ける事には違いなかった。

だが、千本達成は自分の中で今日と決めていた事だし、腹が減ってイライラしていた事もあってか、そこまで冷静でいられる程弁慶も大人ではなかったのだ。

弁慶は今日、十七歳となった。

見た目はまるで成人した青年のように見えるが、弁慶は生まれながらに人よりも少し体が大きかったのだ。

無論自分の誕生した日を祝ってくれる者など、身近に誰一人いない。そしてそれは今に始まった事ではなく、昔から人々に忌み嫌われ恐れられながら生きてきた弁慶としては、今更ながら気に留めるような事ではなかった。

そんな弁慶が千本達成を今日にこだわったのは、弁慶なりの自分への祝いのつもりだったのかもしれない。

「これで酒は呑む事ができるな」

色々と複雑な気持ちを抱きつつも、千本達成と酒にあり付ける事ができるという現状に、弁慶は少しだけ口元を緩めた。

だが。

弁慶は思っていた。

人を斬ったにしては、あまりにも軽すぎる手応えだ、と。

「にしても、なんだかパツとしない締め括りだったな……」

少しばかり物足りなさや疑問を感じながらポツリと零した、その時であった。

「やれやれ、弁慶。そなたのせいで私の帯刀が川に落ちてしまったではないですか」

「???！」

声がする方を咄嗟に振り返ると、橋の欄干らんかんの高くて丸い柱飾りの部分に器用に立っているのは、間違いなく牛若丸本人。

「て、てめえ……」

牛若丸はどこも怪我した様子もなく、飄々と弁慶を見下ろしている。

「なんで生きてやがる……？」

弁慶が驚くのも無理はない。

今まで、弁慶の一振りで無傷だった者は一人もないのだから。

それは他の誰でもない、弁慶が一番よく知っている事実であった。

「弁慶とやら。私はそなたと決闘したかったのではないのだ」

「うるせえ！！俺はお前の帯刀が欲しいんだ！だからお前を倒して
ソレを奪う！」

「だから、先程のそなたの攻撃のせいで私の帯刀は池にポシャッと

……」

「黙りやがれつつ！！」

牛若丸が説明している暇もなく、次々と太刀を入れる弁慶。

「こんの……！ちょこまかと……しやがって！！」

しかし何度も何度も薙刀を振ろうとも、ヒョイヒョイと身軽に欄干の上を飛び回る牛若丸には一向に当たらない。

そうして随分と時間が過ぎた頃。

「……いい加減、……死にやがれっつ！！！」

流石の剛力な弁慶も牛若の軽やかな身のこなしには参ったのか、全く当たらない攻撃を続けながら息を切らせていた。すると、大きく振った一撃が牛若が避けた事によってドンツと橋に勢いよく突き刺さってしまう。

「……つくそ」

深く突き刺さったそれは疲れ切った弁慶の力ではすぐに抜く事ができず、暫くの間あがいていた。

「あーあー、まったく……。少し落ち着きなさい、弁慶。それではまるで誰かさんを見ているようだぞ。あ、ちなみに誰かつてのは私の兄の事なんですがね……。」

「つてめえ……。！！どこまで俺様を愚弄する気だ？！」

その様子を呆れた様に見ていた牛若丸が横から言葉をかけていた途中、怒りを露わにした弁慶が大きな声を出しながら最後の力を振り絞って薙刀を引き抜くと力任せに牛若丸を突いた。

それを避ける牛若丸の所作は、決闘している者の所作とは思えない

程に軽やかで、まるで美しく華麗な舞を踊っているかのようであった。

「だからあ。先程も申したでしょう」

呆れた様子の牛若丸は、弁慶の全身全霊の力を込めた最後の太刀を、いとも簡単に避けて見せてしまったのだ。

「つく……！」

悔しそうな表情の弁慶であったが、その原因はそれだけではない。牛若丸は、突きつけられた薙刀の刃上にヒョイッと乗っかり、扇で口元を隠しながらクスクスと笑ったのである。

これには流石の弁慶も、今まで培ってきた数々の自信がごとごとく崩されてしまう。

「私は、そなたと決闘したいのではない」

牛若丸は相も変わらず微笑みながら言った。それをワナワナと睨みつける弁慶。

「うつせえんだよ、てめえは！そもそもなんで武器を持とうとしねえんだ？！そこに腐る程帯刀はあるんだ、てめえくらい身軽なら一本奪う事くらい容易いだろう！それ使ってさっさと決着を付けやがれ！！」

そんな事を叫ぶ弁慶を余所に、牛若丸は落ち着いた様子のままパンツと扇を広げて嬉しそうに笑った。

「私は、そなたと友になりたいのだ」

「……は、はあああ??」

ガクツと肩の力が抜けた弁慶が薙刀を地面に下げると、またヒョイツと橋の欄干に立った牛若丸。

「友になろう、弁慶」

あまりにも爽やか過ぎる笑顔を向ける牛若丸に、弁慶はたじろいだ。

「本当に阿呆だな、お前は……。自分を殺そうとしている輩と友になりたいだと？阿呆にも程があるぞ」

「そうか？でもよく言うではないか、今日の敵は明日の友だとかなんとか……」

「それを言うなら、『昨日の敵は今日の友』……だろ」

大きな溜息をつく、と、弁慶は参ったというようにその場にどさりと腰を下ろした。

「そうだ、それぞれ」

高らかに笑いながら、牛若丸は弁慶に歩み寄る。

「まあどちらにせよ、昨日であろうが今日であろうが日が経ってしまえば同じ事。だから、友になろう、弁慶」

その時弁慶に向けた牛若丸の笑顔は、朝に咲く一輪の朝顔のようにとても爽やかな笑顔であった。

第五話 友になろう

かくして運命的な出会いを果たした牛若丸と弁慶は、あくる日もあくる日も五条大橋で出会う度に決闘を続けていた。

それは、どうしても牛若丸の帯刀を諦めきれなかった弁慶が、それを奪うその日まで当分の間橋の下で宿を取る事を決めたからだ。

その様を号外の記事を書く記者に目撃されていたとはつゆ知らなかった二人だが、さりとて決闘と考えていたのは弁慶の方だけであり、牛若丸はというとまるで友に会いに来るかのような軽さで每晚現れているのが現状であつた。

「牛若……、それはお前の事であろう？」

そうして一ヶ月程経過した頃。

ある日の昼下がり、乙若から号外を手渡されながら恐る恐るそう問われている牛若丸の姿があつた。

「っはは！……なあ、乙若兄さん。これは、昨日の夜の事かなあ？それとも、その前日の夜の事かなあ。乙若兄さんも知っていたのでしょう？夜な夜な私が弁慶と決闘していた事くらい。それに、今更ですよねえ。弁慶と私との事をこのように記事にしようだなんて。だって、初めて奴に会ったのはもう一か月程も前の事です。決闘なんて両手で数えても足りないくらいしていますよ」

悪びれなく笑う牛若に、乙若は深い溜息をついた。
知っていたのだ。

自分にとって都合が悪い時は、牛若丸はいつもよりも口数が多くなる事を。

「牛若……。わかっているであろう？お前は、女なのだ」

その真っ直ぐ過ぎる言葉に、牛若の肩はビクンと揺れる。

「町の者がお前を男と誤ってしようが、お前が男として生きたいと思っていようが、お前が女なのには変わりはない。そして、男が女を守るのは至極当然の事。そしてお前を守るといふのは、俺が母上から言い遣った最後の願いなのだ。それは、わかっているであろう？」

乙若の問いに、牛若丸は眉を一瞬顰める。

「……もしかして乙若兄さん。私が毎晩いなくなっていた事を知っていて……それで心配していたのですか？」

何かを言いたいのが我慢するが如く、ギョツと口を紡いで俯く乙若。その様子を見て、牛若は眉尻を下げながら乙若に歩み寄った。

「すみませんでした……乙若兄さん」

すぐそこまで近づいてきた乙若に打たれると思った牛若は、ギョツ

と固く目を閉じた。

だが乙若が牛若を打つ事はなく、代わりにその華奢な肩を優しく掴むと真剣な面持ちで牛若の淀みない瞳を見つめた。

「わかれば、よい。俺は別に、剣術や武術に励むなど言っているのではないのだからな。お前が父上や母上を想い、一心不乱に強くなりたいと願っているのは重々わかっていて。……ただ、問題は強くなればなる程、その分危険な者達まで歩み寄ってくるという事なのだ。それは、武蔵坊弁慶然り……。己の身や周りの者を守ってやれるようになるのはいい。だが、強くなればなる程に名が知れ渡り争い事に巻き込まれる。そんな事、お前が良くても俺が心配なのだ。そこだけはわかっておくれ」

ふわりと頬に触れる優しい兄の手に、牛若丸は複雑な笑顔を浮かべたのだった。

「乙若兄さん、私は大丈夫です。私は自分が女である事を重々わかっておりますし、こうして男のように振る舞ってはおりますが、きっと心の根っこの部分は女なのであります。ですが、強くなりたい気持ちは男の牛若も女の牛若も同じ。そして、強くある者と対峙してみたい、友になりたいという気持ちも……」

少しだけ昔よりも大人びた表情を見せる牛若に、乙若もまた複雑な思いで笑みを浮かべる。

「俺は、お前が生きてさえいてくれればいい。そう、そしてできる事なら幸せに……」

女として、という言葉がグツと喉の奥に飲み込んだ乙若は、ポンポンと牛若の頭を優しく撫でた。

「ほら、わかったら対弁慶の為に訓練を始めろぞ。俺が弁慶の役を演じてやる」

「え?! 本当ですか? わあ、久しぶりだなあ! 乙若兄さんに稽古を付けてもらうなんて」

牛若丸は嬉しそうに木刀を手に握り、跳ねる様にして松の木の下に立った。

「お互い遠慮はいりませんよね?」

「ああ、勿論だ」

そうして二人は久方ぶりに剣を交えたのだった。

* * * * *

「して、乙若。その額の傷は一体どうしたのだ?」

そう問うたのは、鞍馬寺の和尚、けいしん慧新。

「別に……、慌てていて転んだだけの事です」

ムツとしながら黙々と夕食を口に運ぶ乙若と、隣でニコニコと美味しそうに食べている牛若。

それを交互に見比べる慧新は、ふーむ、と顎に手を当てて考え込んだ。

「和尚様。もしかしてその御膳、残すではありませんか？」

突然牛若は箸もつけていない慧新の御膳を指さして、残すのなら、と言わんばかりに屈託のない笑顔で片手を差し出した。

「コラ、牛若！人様の物にたかるんじゃない！」

乙若はそんな牛若を一喝し、また黙々と自分の御膳を食べ始めた。牛若はシュンとしてポソポソと食べ始めたのだったが、無言のまま乙若はまだ手を付けていない御膳をそつと牛若の膳に並べてやる。

「おい先短い者から食べ物奪う僧が何処にいる。俺のをやるからそれを食ってもつと背を伸ばせ」

ぶっきらぼうに述べた言葉であつたが、それを聞くや否や牛若は二

コツと満面の笑みを浮かべ、パクパクと元気に食べ始めた。

「ほっほ、乙若。『老い先短い』とは、年老いたこのワシの事か？」

「……あ。いや、違うんです慧新和尚！それは、あの、言葉の綾でして……」

言葉を濁す乙若を見て、慧新は満足そうに笑った。

「いい、いい。兄弟は仲が良いに限る」

慧新はそんな兄弟を優しい面持ちで微笑ましそうに眺めていたのだ。
った。

* * * * *

「弁慶、今日はそなたに握り飯を持ってきたぞ」

その日の夜。

いつものように五条大橋に出向いた牛若丸は、川原の土手に仰向けになっていた弁慶を覗き込んだ。

ニツコリと笑いながら、今日の晩御飯の余りを握り飯にしたものを笹に包み弁慶に掲げている。

「うち、てめえはいつもいつも余計な事を……。今日は決闘する気分じゃねえ。帰れ」

不機嫌そうに舌打ちをすると、牛若丸に背を向ける様にプイッと横を向いた。

「何を言うのだ、弁慶。私はハナから決闘をしに来ている訳ではない。友に会いに来ているのだ」

「……あー、うるせえうるせえ。つつーか何時から俺達が友になっただってんだよ、この阿呆」

「お前が私に負けた日、要するに初めて出会った日からだよ。まったく、何度言えばわかるかなあ。馬鹿なんだから、弁慶は」

「ばっ、馬鹿だと?!」

勢いよく起き上がった弁慶に、クスッと笑いながら笹に包まれた握り飯をグイッと押し付ける牛若丸。

握り飯はまだ温く、先程握ったばかりの物だという事が弁慶にも伺い知れた。

「ほら、もう何日も食っていなかつたが。その鬼の面で顔は見えぬが、相当頼もかけていよう。さっさと食え」

いつもと違い真剣な表情の牛若丸を見て、弁慶は少しだけ考えた後、またソッポを向いた。

「うるせえな、俺に指図するんじゃないやねえよ。それから、何度も言うようだが俺はお前の友になんかならねえ。だからもう俺に構うんじゃないやねえ。友でもねえんだし」

その日はいつもの弁慶らしくない弁慶であった。
この数十日間の間は、足腰が立つまで一度も諦める事なく立ち向かってきていたというのに。

「……わかった。友にならなくてもいいから、これは食え」

少し寂しそうに言った牛若丸は、無理やり弁慶の懷に握り飯を押し付けた。

「っだー、しつけれー！！だから、いらねえつつつてんだろが！」

バシッとそれを払いのけると、包まれていた握り飯は無残にも地面に落ちて崩れてしまう。

あ、と歪な形で土にまみれてしまった握り飯を見つめる牛若丸。
それを見て弁慶は、ヤベ、というように少しだけ焦った。

「……お、俺は悪くねえぞ。それになあ、俺あここんとこずっと考

えていたんだ。お前の帯刀はもう諦めようと」

牛若丸の方を見る事ができないまま、気まずそうに言葉を続ける弁慶。

「考えてもみろ、武器を持たないお前に武器を持った俺が勝てねえんだ。こんなどこにも勝機なんてないだろう。だから、お前と決闘する事は今日もこの先ももうねえ。俺は明日、此处を発つ」

最後の言葉に、ピクリと反応を示した牛若丸。

「……本当か？本当に、明日発ってしまうのか？」

無言のままの弁慶。

その様子を肯定と受け止めた牛若丸は、何かを思い出したように突然川の方に向かって歩を進め出した。

「?!……お、おい。牛若丸？」

ザブザブと川に入っていく、背丈の小さい牛若は、見る見るうちに胸位まで水に浸かってしまう。

「あの阿呆、とうとうトチ狂ったか……」

遠目からその様子を伺っている弁慶は、助けるでもなくただ呆れた様に眺めていた。

今日も夜空はとても綺麗で、真上にぼっかりと浮かんだ満月は牛若と川を照らし出している。

牛若が歩く度に水面には波が立ち、月夜が反射してキラキラと眩しかった。

「あー……もう知らね」

そう言っただけでまた弁慶が横になると、目の前には先程振り払った際に地面に落ちた握り飯が歪んだ形で転がっている。それを見ていると、なぜだか弁慶の心がチクリと痛んだ。

「ふん、アイツが勝手にした事だ。知った事か」

ぐう、と鳴る腹を軽く殴り、空腹を紛らす為に眠りにつこうと静かに瞳を閉じた弁慶。

* * *

「……………慶、……………弁慶」

微かに聞こえた声に弁慶は目を覚ました。

「……んん？」

眠りについてから一体どれ位経ったのだろうか。

わからないが、目を覚ました弁慶の目の前にはびしょ濡れのままの牛若丸が立っていた。

「はあ……。まだいたの、お前？」

呆れた様にそう言い放つと、牛若丸はある物を弁慶に手渡して言った。

「コレを、お前にやる」

「コレは……」

それは、初めて出会った時に池に落ちたはずの牛若丸の帯刀。

「こんなもんいらねえよ、阿呆。俺は倒した相手から奪った帯刀を集めてるんだ。そんな情けで貰った刀なんているか」

ズイツと押し返した弁慶だったが、少しだけ触れた牛若丸の手があまりにも冷たくなっていて驚いてしまう。

そして、押し返されてもグツと耐える牛若丸は俯きながら静かに語

り出した。

「私はな、弁慶。物心ついた頃からこの刀をいつも肌身離さず持っていたのだ。その刀は、当の昔に死んでしまった父上が持っていた刀。とは言つても、別に父から面と向かつて貰ったものではない。人伝いに頂いた物なのだ。それなのになぜだろうな。それを形見だと勝手に思い込む事で、自分が此処にいてもいいのだ、と父上に言ってもらえている気がしていた。実際はそんな事実はないというのにな……。はは、可笑しな話だろう？」

どのくらい水に浸かって帯刀を探していたのだろうか。

牛若丸は白い肌を更に白くさせて小刻みに寒さに震えながら淡々と話した。

「でも、不思議なものだな。弁慶とその橋で出会って対峙した時、この刀をこの川に落とされた。それなのに、今の今までその事すらすっかり忘れていたのだ」

今にも消えて無くなりそうな程に儚い笑顔を浮かべる牛若丸に、弁慶はいつものように荒々しい言葉もかけられずにただ黙っている事しかできなかった。

その時、牛若丸がすぐ目の前まで歩み寄り、弁慶の手に帯刀を握らせた。

「私にはもうコレは必要ない。だから、コレは弁慶にやろう」

「……牛若」

「ああ、その代り友になれってのは冗談だぞ。頑なに嫌がつているのに無理やり友にさせようなんて、いくら私でも悪趣味すぎる。それに、お前がそれを千本の帯刀のうちの一つに加えたくないのであればそれでいい。ただ、私はその帯刀を弁慶に託したいだけなのだから」

月夜に照らされ水が滴りながらもふわりとほほ笑む牛若丸を見て、綺麗だ、と弁慶は純粹に思った。

それはもう、憎いだとか敵だとかいう感情を超えていて、その名の通り『昨日の敵は今日の友』となっているかのようであった。

「っち……。あんなあ、牛若あ。別に俺はもうその帯刀にこだわってなんかいいえ。お前に勝ちたい、ただそれだけだったんだ」

面倒臭そうに起き上がると、横に落ちている土まみれの握り飯をわしっと掴み、ジャリジャリと美味そうに食べ始める。
その様子を驚いたように見つめる牛若丸。

「それになあ、別に俺あ勝てねえから逃げるんじゃあねえ。またどつかで修行して、それからまた此処に戻ってきてお前に挑む為に発つんだ。だからそれまでその帯刀は持っている、阿呆が」

ふんつと鼻息を荒くした弁慶。

「…………弁慶」

「ああ？なんだよ」

相も変わらずぶつきらばうに答えると、丁度握り飯が落ちていた辺りを指差して牛若丸が呟いた。

「そこで今日、馬が糞をしていたよ」

「ぶっはっつ！！…………ま、まじでか？！」

突然食べていた握り飯を吹き出して、慌てふためき始める弁慶。

その様子を見て、ポタポタとしたたり落ちる雫を気にする事もなく牛若丸は高らかに笑った。

それを見て、弁慶もまた高らかに笑う。

その声はシンと静まり返った辺りに心地好い位に響き渡った。

それを陰から除いている者がいるとも知らず、二人は明日の別れを惜しむように最後の和やかな夜を笑いあったのだった。

第六話 黄色い長柄傘（前書き）

検非違使^{けびいし}とは、平安時代の警察官の事だそうです。

第六話 黄色い長柄傘

弁慶が五条大橋を去る、その当日の朝。
梅雨時期に入ろうとしていた京の空は暗く淀み、朝から小雨がぱらついていた。

「っ……」

鞍馬寺の食事は、寺の者が全員で揃ってとるといっしきたりになっている。

「くしっ……！」

小さくクシャミをしたのは、雨ですっかり冷えた静かな本堂の床の上で朝食をとっていた牛若丸。

「どうした牛若、風邪でもひいたか？」

昨晩びしょ濡れの着物のまま帰ってきた事など知る筈もない乙若は、心配そうな面持ちで尋ねた。

「いえ、大丈夫です」

ニコツと微笑んで返す牛若丸を見て、ならいいが、と、またパクパクと御膳に箸をつけ始めた乙若。

だが、牛若の食がいつもの様には進んでいない事くらいすでに気付いていた。

それに気が付いていたもう一人の人物。

「どうしたのだ、牛若丸。箸が進んでないのではないか」

その人物は、誰にも気づかれない程小さな溜息を零していた牛若丸に、ソッと自分の御膳を手渡した。

「ほら、これも食べなさい」

この寺の中で一番の長老、慧新和尚である。

「え……、和尚様、いいんですか？」

「ああ。いつものお前であれば朝から二膳くらい平気でたいらげているのだ、それだけでは足りなかるう」

「ありがとうございます」

牛若丸が慧新の御膳を笑顔で受け取ると、その様を横で見ていた乙若が呆れた様に睨んでいたのだが、それを気にする素振りも見せず笑顔で御膳を食べ始めた。

が、実のところ牛若丸の心はここにあらず。

そしてそれを見透かしていたのは、その場では慧新と乙若のみであった。

その原因というのは他にもない、昨晚弁慶から聞かされた「俺は明日、五条大橋を発つ」という件。

昨晩は決闘する事もなく最後には笑い合って別れたわけだったのだが、何時の刻に発つたとか次の行き先だとかも一切知らされなかった上に、「友になろう」という言葉にも最後まで頑として「ならん」の一点張りだった弁慶。

そんな今までの一通りのやり取りを思い出し、これも仕方のない事なのかもしれないな、とまた静かな溜息をつくのだった。

だが、友でなくとも知人との別れというものは淋しさが伴うもの。それは弁慶も同じであり、今までは普通に会えていたものがパタリと会えなくなると思うと、二人の心にはどこか冷たい風が吹くのであった。

* * *

鞍馬寺に仕える僧達は、朝食を食べ終え自分の仕事である寺の掃除や農作業を一通り終えると、それぞれ好きな事をして良いとされている。

今日は生憎の雨の為、寺の中の掃除だけでわりと早くに皆の仕事が終わった。

「牛若……おい、牛若……。いないのかー？」

降り続く雨は造園の草木や花々を打ち付け、葉や弁の上にまあるい雫をこしらえている。

そこに更に落ちてくる雨粒によって、それらはぼたりぼたりと次々に地面に零れては消えていった。

池には数多の水の波紋が広がり、薄らと見える鯉達の動きも今日はどこか元気がなさそうに静まり返っている。

「牛若ー、聞こえんのかー」

そんな静かに濡れる中庭を大声を出して通り抜けるは、長柄傘をさした乙若。

牛若がいつもいる離れを訪れた乙若は、少しだけ開いていた障子をピシャツと開けた。

「牛若ー……？」

しかし、すでにそこには牛若丸の姿はなかった。

いつもであれば、その時間帯には文机に向かい筆を走らせているはず。

乙若は書きかけにしていた牛若丸の書を見つめて、はあ、と小さな溜息をついた。

「……まあアイツは。町に行ったな」

少し複雑そうな表情を浮かべてはいるが、どこか嬉しそうでもある乙若。

今まで牛若丸が剣術や武術意外の事に興味を示したのは初めての事で、ましてや家族以外の者と自ら関わりを持つとする事も初めてだった。

心配する裏では、そういった牛若丸の変化が嬉しくもあったのだ。

「まったく、馬鹿だなあ。せっかくこうしてマメに手紙を出しているお陰で、あの面倒臭がりが珍しく此処まで出向いたというのに。……早く帰って来いよ」

実の兄、今若に向けて牛若丸が書き綴った手紙を手に、乙若は薄っすらと微笑んだ。

* * * * *

黄色い長柄傘をくるくると回しながら京の町を訪れた美少年、改め美少女の牛若丸。

町行く人々には勿論牛若は男に見えているし、向かう先は勿論弁慶がいた五条大橋である。

無論、弁慶の見送りをしに来たわけではない。ただもしまだその場所に弁慶がいたのなら、それはそれで最後に顔を見る良い機会だな、と思っただけなのだった。

「あ、まだいた」

橋の上に弁慶の姿を見つけると、牛若は自然と笑みを零す。弁慶は傘もささず、橋の真ん中にどっかりと腰を据え腕組みをしていた。

「おい、弁慶―」

カラカラと下駄を鳴らしながら笑顔で歩み寄った牛若丸。

「まだいたのだな。して、そんな所で傘もささずに何をしておるのだ？もしかして傘を持っておらんのか？」

嬉しそうに問う牛若に何の反応を示さず、胡坐をかいたままピクリとも動かない弁慶。

「???……今日、此处を発つのだろう？風邪をひいては大変だ。ほら、私の傘を持っていけ……」
「うるせえ」

弁慶は、牛若丸が差し出した黄色い長柄傘を勢いよく弾き飛ばした。弾かれた傘は、その勢いで地面に転がり橋の欄干にぶつかる。

「……どうした？何かあったのか？随分と機嫌が悪いようだ」

「機嫌？ああ、悪いよ。それも相当な」

そう言つて嘲笑すると、後ろに置いていた武器を手に持ちゆつくりと立ち上がった。

「当たり前じゃねえか。てめえみてえな小便臭いガキに負けたまま此処を去らなきゃならねえなんて、胸糞悪すぎんだろが」

なあ？、と薄ら笑いを浮かべながら問い掛けると、いつもの大薙刀

とは違う武器を牛若に向ける。

「殺す前にひとつ教えてやる。コレはなあ、鉄熊手っていつて、てめえみてえにちょこまかと逃げ回る奴の動きを止めるには打って付けの武器なんだ。それから、なんで今までコレを使わなかったかっていうと、いつも愛用してる薙刀で倒せなかった奴はいなかったからだ。どうしてもアレでてめえを倒したかったからな。……でも、もうそんな事にこだわるのはヤメだ」

そう言つて牛若丸の袖に鋭利に尖つた熊手の先をひっかけ勢いよく手前に引いた。

すると、布が裂ける音と共に破けた牛若丸の着物の隙間からジンワリと紅色が広がってゆく。

「き、きやあー！」

「た、大変だー！」

「子供が武蔵坊弁慶に襲われているぞ！！」

忙しい昼時とあつてか、雨だというのに一触即発な二人の周りには次々と沢山の人垣ができていく。

だが、腕に怪我を負つた牛若丸は臆する事も動揺する事もなく、あくまでも冷静なままであつた。

「やめろ弁慶。決闘をするにもこの時間帯じゃあ人が多すぎる。一般の人も巻き込んでしまつたろうが」

「あー、うるせえうるせえ。いつもいつもてめえはそうやって正義ぶりやがつて……」

鉄熊手を牛若の胸元にドンツと押し付け、更に続けた。

「それからもうひとつ教えてやるよ。知ってたか？なんで俺がお前と友にならなかったのか。それはなあ、てめえのそういう正義ぶつてすかした所が大嫌いだからだよ」

「……………」

打ち付ける雨の雫が髪を伝って牛若丸の長い睫毛に零れ落ちたが、瞬きひとつせず無言のまま弁慶を見つめていた。

その堂々たる姿を見て、弁慶はたまらず舌打ちを返す。

「っち。……その真っ直ぐに見据えた目もなあ、本当は……、胸焼けしそうなくらいむかつ腹が立つんだよっ！」

弁慶がひと際大きな声を上げたかと思うと、傷付いた牛若丸の片腕に躊躇なく鉄熊手で攻撃を加えた。

「きゃあー!!」

「おい、誰か！^{けびいし}検非違使呼んで来い！」

周りの者達は騒ぎ立てていたが、当の本人はいつものように攻撃をかわして橋の欄干に立っていた。

牛若は至って冷静ではあったが、その表情はどこか寂しげで、袖が引きちぎられた着物からは白く華奢な片腕が覗いている。

その傷口から透明な雨水と共に鮮血が流れ滴っていた。

「弁慶、もうじき検非違使がここに駆けつける。その前に此処を発

て」

ぺろりと傷口を舐めた牛若丸は、いつになく真剣な表情で言った。

「ああ、てめえに言われなくてもな」

弁慶は鉄熊手を背負うと、束になった帯刀を手に持ち最後に牛若丸に告げる。

「てめえなんかと会わなけりや良かった。まあ、もう二度と。てめえなんかと会う事もないが」

その言葉にピクリとだけ反応を示した牛若丸。
時が止まったかのように辺りは静かになった気がした。

「……おい！お前らそこで何してる！！」
「すぐに武器を捨てなさい！」

遠くから検非違使が走って来るのが見えると、野次馬の者達が散り始める。

すると弁慶は沢山の武器を抱え、そのまま何も言葉を発さずに早い逃げ足で雨の中消え去っていった。

「……弁慶」

ポツリと零した牛若丸。

その近くには、寂しそくに転がる黄色い長柄傘と濃淡の破れた着物の袖が、静かに雨に濡れていた。

第七話 兄、今若

午後になっても未だ降り続けている雨の中。

暫くして、項垂れるように鞍馬寺に返ってきた牛若丸は、本堂の縁側で和歌を詠んでいた乙若を見つけ、そこにゆっくりと腰をかけた。

「乙若兄さん、ただいま戻りました」

「おお、おかえり。随分と遅かったな、牛わ……」

そう言いかけて懷紙から横に座る弟へ視線を移すと、乙若の動きはびたりと固まってしまふ。

それもそのはず。

したたと頭髮と着物から滴る水滴、袖が破け露わになった片腕、更にはその腕に酷い怪我をしているという尋常じゃない姿で帰ってきた牛若丸。

その様を見てパタリと筆と懷紙を床に落とし、慌てて露わになった白くか細い腕を掴んだ。

「お、おい！一体どうしたのだ、この腕は？！」

「ああ……もう。いつもいつもうるさいんですよ、乙若兄さんの声は。少しは落ち着いてください」

ウザったいとも言いたげにあまりにも落ち着きすぎている呑気な

までの牛若丸を見て、乙若はわなわなと声を更に荒げる。

「何を悠長な事を！！まさかこの傷、あの武蔵坊弁慶とやらに……？！しかも、なんで傘持つていったのにずぶ濡れなんだお前は？！」
裏返った声色が乙若の心中を語っており、あまりにも突然で、そして恐れていた事が起こってしまったのかと震える腕には自然と力が入ってしまったのだった。

「イタタタ、痛いってば乙若兄さん。一応これでも怪我人なんですからね、もう少しいたわってもらえますか。あ、それから。袖破けてしまったので縫い付けてください」

はいコレ、と言って破けた袖を差し出してヘラッと笑う牛若丸に、乙若は更にわなわなと震えた。

「こんの馬鹿者がっ！！」

そしてそれをバツと奪い取るとくるりと牛若丸に向き直る。
ああ、また叱られるのだな、と悟った牛若丸は、ゆっくりと乙若に向き直り俯いた。

「なんでお前はそう、いつもいつも……」

「あー、うるせえ！！！」

と、突然勢いよくガラリと開いた後ろの襖。

「「?!」」

「乙若あ、うるせえぞ〜！眠れねえだろうがぁ〜！」

驚いた二人の後ろに立っていたのは、眠たそうな顔をした二十歳くらいの僧侶。

「こつちあ長旅でクタクタなんだ、ちつたあ静かにしろ、この戯たわけが」

ふあ〜と欠伸をした後に綺麗に剃頭された頭をボリボリとかいて気怠きだそうな声で言った。

「つつーかよお、乙若こそなんでそういう時も怒ってんだ？」

「そ、そんな事はない……です、よ」

心なしか、乙若がいつもよりも控えめに、そしてぎこちなく見える。

「ああ、わかった。カルシウムが足りねえんだな。お前は昔っから青魚が嫌いだったもんなあ。もつと小魚を食え、この戯たわけが」

「あイタ！」

コツンという小気味のいい音を立てて小突かれた乙若。

ぶつぶつと文句を垂れながら赤くなった坊主頭を撫でる乙若に、こつも堂々と一喝を入られる人物。

今身近にいる存在でそんな人物は、和尚である慧新意外に一人しかない。

「今若兄さん！！」

その青年は、牛若にとって乙若より更に上の兄。
今若改め、隆超。

「よお。久方ぶりだなあ、牛若丸！会いたかったぞ」

二カつと笑った顔はなんとも爽やかで、憎らしくない着物の着こなしは相変わらず。

胸元をボリボリとかいているだらしない風貌と、出家した僧だというのに口が悪いところも昔となら変わる事はなく、目の前にいるは二人の知る今若そのものの姿であった。

「今若兄さんっ！お久しぶりですね！！何時こちらに……？」

そんな今若を見るなり嬉しそうな笑顔を隠しきれない様子の牛若丸。そんな様子を尻目に、ち、と小さく舌打ちをする乙若であった。

「ついさっき着いたところなんだ。乙若とは少し話したんだが、どうしても眠くてなあ。っつーのも、鞍馬寺が思ってたよりも遠くてよお。俺も馬もビックリしちまって途中何度も引き返そうかと思っただぞ」

ガハハと豪快に笑う今若の腕にしがみつくように牛若丸は寄り添う。

「そうなんですか？引き返してくれなくて良かったあ！では、疲れが癒えるまでゆっくりしていったらいいですよ。こちらに来て頂け

るなら、私も色々と準備しましたのに」

「ああ、いい、いい。飯ならさつき乙若にたらふく食わせてもらったところだし。それよりも悪かったなあ、牛若」

「え？」

「ほら、何通も文をもらっただろう？ つつうのに俺あ返事ひとつ返さねえでいちまってさ。まあでも、俺あこの通りのズボラな性格だ。それは勿論お前らも知ってるだろうが、恥ずかしながら今まで生きてきて文なんてもん一度も書いた事もねえもんだからさ。だからこうして気の向くまま、サプライズ的にお前らに会いに来たってわけよ」

だから許せ、と爽やかに笑う今若。

なんとも当人らしい、と二人の弟は思う。

特に一番下の弟である牛若丸は、こんな自由奔放で男らしい今若が大好きであつた。

「そんな今若兄さん、お返事なんていいんです」

「そして俺は、いつも自由に動き回る兄の尻拭い……か」

ぼそり小さく呟いたのは、そんな今若と牛若のやりとりをあまり面白くなさそうに見ている乙若。

「便りが無いのが元気の証しって言いますし、初めからお返事なんて期待してませんから」

「お、なんだ牛若。お前も言うようになったなあ」

腕にガツシリとしがみつく得意げな弟の顔を見て、今若は嬉しそうに笑った。

「ふふ、当前です。会えなかった間私も成長してるんですよ。……それに、私はこうして無事にまたこの世で会えるという事が、何よりも嬉しいんです。……して、いつまで滞在されるんです？ 暫くは此処にいるのでしょうか？」

まるで何かをせがむ子供の様に、丸い目をキラキラさせて上目遣いで兄を見つめる牛若丸。

「うーん、ハッキリとは決めてはいないが……、一応お前らと話したい事を話したら、数日後には帰ろうかと思ってる。あんまし長居してもこの俺の事だ、きつと帰んのが面倒になってずーっと居座っちまう。そうなたらお前らも困るだろう？」

な？とワシッと頭を撫でてやると、牛若丸はにっこりと嬉しそうに笑った。

「そんな事ないですよ！ なんなら今若兄さんもここの僧になると良い！」

その顔は久しく見せた事のなかった牛若丸の子供らしい表情であり、それを見ていた今若は勿論、乙若もつい顔が綻んでしまうのだった。

「っはっはっは！ この、戯け」

今若がパチンと牛若の額を軽く人差し指ではじくと、イタ、と目を瞑った。

「こんな大飯ぐらいの俺が此処の僧になったら、此処の和尚が寺の食物が無くなると嘆いてしまつたろうが。それに、俺あ醍醐寺の和尚に拾つて貰つた返しても返しきれねえ恩がある。こんな荒くれ者を僧として養つてくれてんだ、俺にとつちあ他にねえ程ありがてえ話だ」

言つてまた豪快に今若は笑う。

「そうですよね」

「確かに」

つられて笑う牛若丸と乙若であつたのだが。

「……まあ、それはそうとして。」

そう区切つて、急に真剣な表情になつた今若。

「牛若、少しだけ二人で話せるか？」

そう言つて牛若丸と今若は乙若を一人本堂に置いて外へ出向いたのであつた。

第八話 優しい雨（前書き）

第七話が長かったので読みやすい様に区切りました。

第八話 優しい雨

雨の中、寺の前の緩やかな石段を長柄傘をさしてゆっくりと降りてゆく今若と牛若丸。

辺りには冷たい風が時折吹いていて、牛若の細い肩を窄ませた。それにすぐさま気が付いた今若は、自身で羽織っていた上着を無造作にバサツとかけてやると、牛若丸はふふつと嬉しそうに笑う。そんな無言の空間を心地好いと感じていた牛若丸であったが、自ら静寂を破るように口を開いた。

「……珍しいですね、今若兄さんから私に話そうなんて声をかけていただけるだなんて」

幼い頃から一緒にいる兄ではあったのだが、昔から自由奔放でフラフラとしていた七つも年上の今若。

乙若とは違つてそう頻繁に話せる機会は持てなかった。

「そうだよなあ。思い返してみれば昔のお前つて、俺の姿を見つけるなり稽古をつけてほしいだのなんだのと毎日のようにせがんで、いつもギヤーギヤーうるさかつたっけなあ。……っはは、今思い返しても笑えるぜ。まだ足取りもおぼつかないちっさなガキが、身の丈倍程もある俺に泣きながら何度も挑んでくる姿」

数段先の石段を降りている今若は傘でその表情は見えないも、ケラケラと高笑いをしているその声から懐かしそうに話しているのである様が目に浮かんだ。

いつもよりも低い位置に立つ兄に親近感を覚え、今若の傘の柄を見

上げて牛若丸は笑った。

「あー、もしかして今若兄さん。私の事馬鹿にしてませんか?？」

「してねえって」

久しぶりで嬉しくて、ついはいだ言葉を発してしまう牛若丸であつたが、兄である今若はそんな事微塵も気にする事もなく、逆に我儘を言つ弟を愛おしいとでも言うかのように満足げな笑みを浮かべている。

そして馬鹿にしないとは言いつつも、ゆらゆらと揺れる目の前の長柄傘は、目に見えて笑いを堪えているのだと牛若丸に察知させていた。

「絶対馬鹿にしてる……」

「っはは。……ああ、でも確かに。俺あぶつちやけそれが面倒臭くつてさあ。いつも適当に相手してやってたわけなんだけどな」

「え、ええー??? そうだったんですかあ? そんなの知らなかったですよー」

ムウツと頬を膨らませ口を尖らせた牛若は、後ろを歩きながら恥ずかしそうにソツポを向いた。

相も変わらず真つ白なままの牛若丸を肌で感じ、はっはっはと心から笑っている今若。

「もっ……」

その声を聞いて、更に機嫌を損ねる牛若丸。

「相変わらず酷いんだから、今若兄さ……」

「でも。」

今若はその言葉を遮るとくるりと振り返り、牛若を真っ直ぐに見つめた。

「そんないつも適当な俺に、お前はいつでも本気で挑んできていたな」

その瞳は先程までの悪ふざけを言っていた今若とは違い、立派な大人の男、そして威厳ある兄の瞳であった。

「そのお前の直向きな姿勢に、まだまだガキだったあの頃の俺も色々と教わったもんだ」

「そ、そんな。私が今若兄さんに教えられる事なんてなにも……」

咄嗟の事に牛若丸がもじもじしていると、今若はフツと優しく微笑んで牛若の肩に手を置く。

「……だから俺あ、女であるお前を一人の男だと認めたんだぞ」

静かに、そしてはつきりと発した低い声。
今若のその言葉の意味の重さが、今の牛若丸には手に取るようにわかり言葉を失った。

「……………」

「……っはははは！なんて顔してんだよ、この戯け！鏡で見えて見ろ、今相当不細工な面してんぞ。まったく、黙っていれば明眸皓齒めいぼうこうしだってのになあ」

押し黙る牛若を見てまたいつもの調子に戻り高らかに笑うと、今若は握った拳を軽く額に小突いた。

「……もう。本当に今若兄さんは相変わらず口が悪いんだから」

言って嬉しそうに牛若丸も笑う。

「なににせよ、お前が元気そうで俺も安心した」

またくるりと牛若に背を向けて歩を進め出した後姿を見つめ、牛若丸は一呼吸おいてから清々しそうに言った。

「私は、嬉しいです。今若兄さんは、私にとって今も昔も憧れの人なんですから……………」

「おいおいおい、まさか実の兄に恋心を抱いてるだなんて言うなよ」

「いやだなあ、違いますよ」

冗談を言う今若を一笑して弟、牛若は続ける。

「私にとって今若兄さんは、私の目指している男……。強くて情に厚くて器が大きく大らか、それでいて時に我儘で自分勝手に他人をも巻き込んでしまう。でも、巻き込んでしまった人に嫌な気をさせたりしない、その真つ直ぐな心と笑顔……。私はそんな今若兄さん、貴男を目標に今まで頑張ってきたんです」

「……はは。買い被り過ぎだ、この戯けが」

照れているのだろうか、背を向けたまま振り返ろうとしない今若に牛若丸は続けて言葉を紡いだ。

「そんな兄者に男として認めてもらえるだなんて、この上ない幸せでございます」

シトシトと鳴り止まない雨音。
暫く沈黙が流れる。

満足げな牛若丸を余所に、複雑そうな表情を浮かべていた今若は、静かにそしてゆっくりとその重たい口を開いた。

「本当に、そうなのか……？」

「え……？」

思いもよらない兄の返答に、素つ頓狂な声を上げた牛若丸。静かにゆっくりと今若は振り返り、そつと包帯の巻かれた腕の部分に触って切なそうに弟を見つめた。

「牛若丸。お前は本当に、男として人に認められたいのか……？」

いつもと違う今若の真剣な表情。

「な、何が言いたいんですか、今若兄さん。確かに私の体は女、でも心は男です。それを悟られないが為、毎日飽きる程剣術や武術に明け暮れてきた。……その生き様は、生まれながらにして決まった事。それを今更どうこう考えるだなんて」

馬鹿げてる、と続けようとした牛若丸の口に、そつと片手を添えた今若。

口を塞がれた牛若丸は、不思議そうに兄の顔を見上げた。

「それとも。女なのに男として懸命に生きているという事を、人に認められたいのか……？」

何を言っているのだろう、牛若丸はわからなかった。

否、わかりなくなかったのだ。

牛若丸には、今まで男として生きていく選択肢しか与えられていなかったのだから。

そんな事は至極当然の事であつて、深く考え否定などできる事ではあつてはならないのだ。

「今若、兄さん……？」

「いいんだ、牛若。今だけは、本音を言ってもいいんだぞ」

ゆっくりと口元から退けられた片手。

今までかけられた事のない言葉に困惑の色を隠せない牛若丸は、回転の速い頭も珍しく今日は事の変動に追いつかないようであつた。

「わ、私……」

「もうお前も子供じゃないのだ。それに、此処で聞いているのはで
きそこないの僧、俺しかいねえ。他の誰も聞いちゃいねえんだ。
…吐き出しちまえよ」

優しく微笑む目の前の兄に、牛若丸は今までに感じた事のない程に
抑えきれない感情を覚えた。

「私……私は……」

こみ上げてくる瞳の奥の熱いものを堪えきれないでいる牛若。
それに気が付いていた兄は、ぎゅうつとその身をきつく抱き寄せた。
牛若の持っていた黄色い長柄傘は、今日の五条大橋の時の様に石段
の上に寂しそうに転がってゆく。

「牛若……お前は十四年もの間、今の今までよく突っ走ってきたな。
乙若も俺も、その事は俺達兄弟、そして父と母が誰よりもよくわか
っている」

優しく、そして何度も何度も頭を撫でる牛若の大きな手。
そのぬくもりを感じて、次から次へと牛若丸の瞳から零れる大きな
雫。

「だから、もうそろそろ本音の弱音を吐く時間を与えてやってもい
いのではないか……？」

今日はやけに優しい音のする雨なのだな、と、今若は牛若丸の震える細い肩を抱きながら、静かに灰色の空を仰ぎ見るのだった。

第九話 父上と母上（前書き）

お気に入り登録してくださっている方、評価くださった方、ありがとうございます！とても励みになります。この小説を書くにあたって歴史というものに初めて向き合った気がします。昔は大嫌いだった歴史は知れば知る程とても面白くて、どうして学生時代にそう思えなかったのかと悔やまれました（笑）そしてどうかこれからも、このできそこないの小説を見守ってください。

第九話 父上と母上

鞍馬寺本堂前に続く石段。

そこを降りて行った先にある仁王門脇の中門の下に差し掛かった時、二人の青年は打ち付ける静かな雨を凌ぐ為、軒下で一旦傘をたたみ足を止める事にした。

「一向に止みそうもねえなあ、この雨……」

見上げた先に広がる灰色の空を眺めながら、兄、今若はそう呟いた。

「ええ。近くの鴨川が、この雨のせいで氾濫しなければいいのですが……」

同じく薄暗い空を見上げながら心配そうにそう呟いたのは、弟、牛若丸。

そんな二人を包んでいた空気は、肌寒い風に反してとても柔らかいものであった。それはきつと、今若が纏う緩い氣からきているのだと、牛若丸はわかっていた。

「あの……、先程は取り乱したりしてすみませんでした……」

気まずそうに柱に寄りかかり、申し訳なさそうに言うつとそつと牛若は俯く。

「なあに、そんな事まったく俺あ構わんさ」

っはっはっは、と高笑いをする、とどかりとその場に胡坐をかいて座り、気怠そうに薄暗い空を仰ぎ見て更に問うた。

「俺はなあ、牛若丸。別に此処までお前や乙若に説教垂れに来たわけではないのだぞ？此処に来た理由は他でもない、女であるお前と腹を割つて話をしに来ただけの事」

「女である、私と……？」

キョトンとしている牛若を、ふ、と小さく笑つた今若。

「これはな、お前を女として見ているから言つてゐるのではない。男として認めているからこそ、女として、妹としてのお前の本音を知りたいのだ。……兄として、な」

「い、妹……？」

今まで言われた事のない、妹という言葉。

それがこそばゆくてもどかしくて、どうしていいのかわからなくなった牛若丸は、気が付くと傘もささずに軒下から出て雨に打たれていた。

「おい、そこにいては雨に濡れてしまう。風邪をひくぞ、牛若」

こっちに来い、と腕を引く今若であつたが、そんな兄の言葉にゆっくりと振り返くと、儚い程に美しく今にも泣き出しそうな程に悲しい笑顔で笑つた。

「ふふふ、今若兄さん……。懐かしいですね。昔にもこういう事、ありました」

「……？そうだったか……？？」

「ええ……。あれは確か、私達が母上の元を離れて少ししてから的事……」

そしてこれは、牛若丸がこの世に生を授かったばかりの話から始まる。

* * * * *

「義朝様……、無事、ご子息が御生まれになりました……」

静かに瞑想にふけていた父、源義朝の元に、一人の付き人からその吉報が告げられた。

「なに？本当か！」

牛若が生まれる当時、すでに八人もの子供がいた義朝。

周囲では女兒は使えん、男児でなければその場で殺してしまえ、という酷な声が多々上がっていた。

そんな中、嬉しそうな義朝はたまらず立ち上がってその部屋へと向かおうとしている。

そんな義朝のすぐ傍まで近寄った付き人は、耳打ちで次のような言葉を告げた。

「……義朝様。何やら義朝様にだけお話ししたい事があると、常盤様がお呼びでございます」

「……うむ、そうか。では我が先に一人で参ろう」

表情を一瞬濁すと簡潔にそう述べて、一人常盤と愛おしい九男の息子が待つ部屋へとゆっくりと急いだ義朝。

「よく頑張ったな、常盤」

その常盤と我が息子がいる部屋に入るや否や、義朝は優しく妻の頭を撫でる。

妻常盤は、そんな鷹揚とした夫を疲れ果てた様に横になりながら下から見つめて、そっと静かに呟いた。

「申し訳、ございませんでした……」

「……どうした？……まさか、」

と言葉を続けようとした義朝に、産婆は恐る恐る告げる。

「義朝様……御生まれになった御子は、男児にあらず……。残念ながら、女児でございました」

申し訳ございません、と深々と腰を曲げる産婆に、泣きそうな表情の常盤。

すぐさま、そんな重苦しい空気を一掃するように義朝は高らかに笑った。

「あつはつはつは！そうかそうかー！ご苦労であつたなあ、常盤！そして、産婆！いやあ、無事に生まれてきてくれて本当に良かった」

嬉しそうにその女児を手に抱く義朝は、本当に嬉しそうに笑っている。

その様を常盤と産婆は涙を堪えながら見つめていた。

「おいおい、何を泣く事があるというのだ？可笑しな奴らだなあ。ほら、お前らも笑え！嬉しかろうが、こんなにも元気で可愛らしい子供が生まれてきてくれたのだから」

ほぎゃあほぎゃあ、と自己主張をするかのように泣き続ける九男である筈であつた二人の子。

「そう申されても、義朝様……。このままではその子の命、他の物の手で呆気なく断たれてしましましょう。私のような妾の産んだ子が女児であつただなんてあるまじき事……。役立たずと言われても

私は構いませぬ、……ですが、この子には何の罪もないのです。だ
というのに、先程から他の者達もソワソワとこちらの様子を伺って
おりました。……私はどうしたらいいのです？殺されると解ってい
て、皆の前にこの子を連れて行くべきなのでしょう。それとも今
この場で、私共の手で……」

泣き崩れる常盤に、義朝は悠然と告げた。

「違つよ、常盤。お前の選択肢に、正しい答えはないよ」

「え……？」

嬉しそうに赤子を抱く義朝は、迷いなき様子で真つ直ぐに我が子を見つめる。

「簡単であろう。この子を、男の子として育て上げるのだ」

それを聞いた二人の女は思う。

なんという無理やりで可笑しなやり方であろう、と。

だけでも暫くして二人は思った。

あまりにもストレート過ぎて、誰にもわからないのではないであろ

うか、とも。

「何を悩む必要がある？お前は、この子を生かしたいのか、それとも……」

そう言いかけたところで、常盤はゆっくりと半身を起こし、ハツキリとそして堂々たる物言いで告げた。

「ええ、そうですね。決めました、この子の名は牛若丸……。闘牛のようにとっても元気で負けん気の強い男の子に育ちますように、と貴方様と一緒に決めていた名。この子を今日から牛若丸と名付け、立派な男児として育て上げましょう」

その姿は凜としていて、大層美しかったという。

「はっはっはっは！だとよ、牛若丸！強い母で良かったなあ。きつとお前は常盤に似て、負けん気の強い美しい男に育とうぞ」

義朝の手によって高々と抱きかえられた牛若丸は、それはそれは元気に泣いた。

そうして、女である体を持った男、牛若丸は其処に誕生した。

二年程過ぎようとしていた頃。

城の中庭を見渡せる縁側の一角に、難しい顔をして座っていた義朝。

「お父上ー。ほら、みてみて」

庭で遊んでいた三兄弟のうちの一人、六歳になる乙若が、父である義朝に抱きついて庭の先を指差した。

「ほう、これはこれは……」

そこには棒切れを持った今若とやりあう、細い棒切れを持った幼子の姿が。

「牛若丸も、なかなかどうしてやるではないか」

その様はそれはそれは楽しそうで、まるで本物の男児であるかのよう。

父、義朝は、その様子を嬉しそうに眺めた。

「どんな玩具を渡しても喜ばないのに、木の棒を渡すとすごく喜ぶんだ。可笑しい奴でしょう？」

そう言つて乙若も、そんな弟の姿を嬉しそうに眺めた。

「そうかそうかー！お前も今若も、剣術も武術も真面目にやろうとせんからなあ。このままでは牛若丸にすぐ追い越されてしまうぞー？」

ぐりぐりと頭を撫でつけてやると、乙若はハッと我に返つたように父を見上げた。

「そ、そんな事ないです！僕だつて、僕だつて……！」

少し焦つたような表情で近くの棒を持ち今若と牛若の元へ走つて行く乙若。

が、途中あつた石に蹴つまずいて転んでしまう。

えんえんと泣きわめく乙若であつたのだが、義朝も二人の兄弟もそんな様を高らかに笑つて見ていた。

「この戯けがー、んなもんで泣いてたら牛若に笑われんぞー！」

今若がやれやれといった表情で遠くから大声を張り上げると、なにくそと乙若はムクつと立ち上がり、二人にかかつて行つてボコボコにやられている。

「はははは……。アイツら、仲良いんだか悪いんだかわからんなあ」
それをとても嬉しそうに見つめる義朝。

「もしかしてもしかすると、牛若には生まれ持って剣の才があるに
違いない。そうだ、我が剣を授けてやろうぞ」

その義朝の言葉は、その時にはただの思いつきだったのかもしれない。
い。

だが、後にその帯刀が牛若丸の人生を大きく変える事になるうとは、
この時誰も知る由もなかった。

第十話 母は強し（前書き）

二歳児の牛若丸の口調を、幼くしました。

第十話 母は強し

父母兄弟五人揃つての、しばしの幸せな生活。

「ははうえー」

心許な氣に肌寒くなった縁側に座り外を眺めていた母常盤に、おぼつかない口調でそう話しかけた牛若丸は、母の膝上に両手を置き顔を覗き込むようにして首を傾げた。

「ははうえ、おちちうえはどこお？」

「牛若丸……、貴方の父上は今、私達一族の為にとても大切な戦をしているですよ。早く帰つて来ていただく為にも、毎日お祈りしましょうね」

微笑んで小さな頭を優しく撫でてやると、更に首を傾げる。

「い・く・さ……??」

聞いた事のない単語に目を丸くさせている牛若を見て、クス、と常盤は笑った。

「そう、戦。戦というのはね、大切なモノを守る為、殿御が己のすべてをかけて戦う事を言うのです。それは勿論、己の命も……」

まだ世を知らない可愛いわが子を撫でながら、クシャッと一瞬だけ悲哀に満ちた表情を見せた。

「本当は、そんなものがなくとも幸せに暮らしてゆける世の中になればいいのですがね」

貴方達の為にも……、と小さく呟きながら、零れてしまいそうな涙を堪える為か、また顔を上げて遠い外を眺める常盤御前。

「……おいのり、おいのり！」

小さな両の手を合わせ正座をし、一生懸命何度も何度も天に祈りを捧げる幼子。

「かみさま、ほとけさま。どうか、どうか、おちちうえを、おまもりください。どうか、どうか……」

その姿を見ていると微笑ましい反面、常盤の胸はきつく締め付けられ息苦しくなった。

様々な現状を知っていた常盤は、今回はそう簡単にはいくものではないとわかっていたからだ。

そのような俗物の事情を知る由もない牛若丸は、それから毎日のように祈りを欠かす事はなかった。

が、それは叶わぬ祈りと終わる。
幸せだった一瞬の日常は、空を舞う雪の様に儚く、何の前触れもなく終わりを告げた。

季節はすでに厳冬の候。

その頃藤原信頼方について平治の乱を起こしていた真っ只中の父義朝は、最中念願であった信西討伐は果たしたものの、その後平清盛らに次々と離反され兵力を失ってゆく。

誤算であった。

自分よりも若い清盛という切れ者の存在。

清盛に土壇場で寝返られる形になった義朝軍は、圧倒的に劣っていた兵数ではどうする事もできず、京で呆気なくも壊滅させられてしまう。

悔しくも敗れた義朝は信頼の元を離れ、長男義平、次男朝長、三男頼朝、その他数人の一族と家臣らと共に東街道へ下る。

途中度重なる落ち武者狩りの襲撃を受け数人の者を亡くし一行ともはぐれ、その身だけになった義朝はなんとか尾張国まで逃げた。

その時、家人であった長田忠致の元に身を寄せる事となる。

そこですべてを切り返すはずであった、
がしかし、その考えは甘かったのだ。

そこで長田の父子に裏切られ、義朝は入浴中に襲撃を受け、呆気なくもその最期を遂げてしまう事となった。

なぜか最後を迎える義朝のその表情は苦渋に満ちたものではなく、一寸の曇りなき笑顔であったという。

その凶報を耳にしたばかりの常盤御前は、係累の難を避ける為
すぐさま馬を走らせていた。

「ははうえ……?。」

雪がちらつく中、人を乗せた馬二頭の走る足音が林の道中に響く。

「おちちうえはどこ……?。」

白い息を吐きながら、あどけない表情でそう問った牛若丸を、大事
そうに腕に抱えた常盤。

「……………」

「ははうえ、おちちうえ……」

「これ牛若丸、しっかりと掴まっていなさい。振り落とされてしま
います」

言葉に詰まってしまい質問とは違う言葉を返すと、牛若丸は言われ
た通りギユウッと母にしがみついた。

斜め後ろに目線を移し、同じ速さで後ろを走るもう一頭の白く小さ
な仔馬に乗った二人の我が子の姿を確認する。

九歳の今若の後ろに抱きつくような形で七歳の今若が乗っていて、
すでに父の最期を告げていた二人はどちらも今にも泣き出してしま
いそんな表情をしてるのが常盤にもわかった。

寒さと不安と悲しみに震える小さな三人の体に居た堪れなくなり、こみ上げるどうしようもない無念さと怒りで呼吸が乱れる。

なんとか平常心を取り戻さなくてはと、ふう……、とゆつくりと一呼吸ついて、懷にしがみついて震えている牛若丸の寒さで桃色に染まったぷつくりと白く柔らかい頬に優しく触れた。

「牛若丸、……よく、お聞きなさい」

馬に揺られながら、振り落とされてしまわないよう手綱をきつく握りしめ、グツと涙を堪えて静かに告げた。

「お父上は、遠い所へ行ってしまったされました。極楽浄土という天国です」

「てんごく？……いつ、かえってくるの？」

「……もう、戻っては来ません」

「え……？」

何を言っているのかわからない、という表情で目をまん丸くさせている、まだ二歳程の幼い牛若丸。
その無垢な顔を見て更に胸が苦しくなる母常盤。

齒を食いしばって、言わなければならない次の言葉を紡いだ。

「でも、でもね牛若丸。ここからがとっても重要よ。肝に銘じなさい」

そうして小さな顔に凜と輝く穢れを知らないつばらな瞳を見つめて、強く静かに続けた。

「これからは貴方達兄弟三人、力を合わせて強く生きていかなばなりません」

「ははうえは……？」

「本当は貴方達と共にいたいんだけど、私もすぐに都に戻らねばならない……。ですが父も母も、貴方達の傍にいれなくとも心はひとつ。いつでも心は一緒にあるのです。それは私達の人生が、此の世の中がどう変わっていかうとも、いつまでも永続的に変わる事はありません。何がどう変わっていかうとも、貴方達三人は義朝様と私の子、そして愛する家族なのです」

わかりましたね、と、肯定しか認めない問い。

今まで見た事もない真剣な表情の母を目の前に、これから起こり得る只ならぬ何かを感じたのか、目に涙を溜める牛若丸。

「泣いてはいけません、牛若丸」

そんな我が子を、キツと睨み付けて常盤は強い口調で言った。

「貴方は男。体は女でも、列記とした正真正銘の男児なのですよ。だから、絶対にどんな男よりも強くあらねばなりません。家族や周りの者達、そして自分を守る為にも剣術や武術を身に付けて誰よりも強くなりなさい……。そして、男としてこの地に堂々と生きていくのです。女として生きられるその日が来るまでは……」

それは一体いつなのだろうか、言っておいて自分でそう思う母常盤。果たしてそんな日が来るのだろうか。

今まで味方に付いていた下の者の中で、敵側にまわった者も大勢いる。

万が一、その者達の中に自分達を快く思わない者がいたとして、今まで自分の子を女児を男児だと偽って育て上げた事が知れ渡れば、自分は勿論の事、牛若丸や乙若今若にも何らかの危害が及ばないとも言切れなかった。

今まではそんな弱き自分達を守ってくれる強い男、夫の義朝。だが義朝亡き今、これからは義朝のただの側室であった自分、力なき女である自分のみがこの子達を救うただ一人の成人なのだ。

「っ……く」

守りたいものも守る事のできない不甲斐無い自分に、悔し涙が零れそうになる。

でも、流してはいけない。

我が子に泣くと言ったのだから、母親である自分が泣くわけにはいかないのだ。

* * *

暫く走って、二手の分かれ道に差し掛かった所で馬を止めた。

「ここで、お別れです」

そう言つて、常盤は乙若達の乗る仔馬に牛若丸を乗せ変えた。

今若と乙若の間に牛若丸を座らせて、途中決して振り落とされる事がないよう腰帶で三人をきつく縛る。

「痛いよう、母上」

「うるせ、乙若。少し我慢しろ」

一番最後尾の乙若は涙声で不安げな表情を隠せなかったが、三人の中で一番上の兄である今若は、真つ赤な目を腫らしながらも毅然とした態度で振る舞った。

そんな幼い我が子を引きちぎれるような思いで最後に見つめ、寒さに震える三人に自分の羽織をかけてやって重たい口をゆっくりと開いた。

「いいですか、ここからは絶対に立ち止まる事なくお寺まで行くのです。この寒さもお寺に着くまでの辛抱ですからね。お寺に着いた

ら住職様が暖かいご飯と暖かい寢床を与えてくださいます。これからはそこが貴方達の私宅……、そこで住職様の言う事をよく聞いて立派な大人になるのです。わかりましたね？」

三人の子供達は、ただ静かに首を縦に振った。

自分達にとって今はそれしか道はないのだと、幼きながらも感じたのだろう。

「良い子ですね。……それから、最後にひとつだけ貴方達に言わなければならぬ事があります。貴方達、というよりも、今若と乙若、貴方達二人に」

きよとんとした顔をして、二人は常盤を見上げた。

「牛若丸は、貴方達の弟ではありません」

「「え?!」」

「血が繋がっていない、という意味ではありません。弟ではなく、妹、という意味です。牛若丸は女として産まれた、列記とした女児なのです」

「「……ええ???」」

まさか、と二人は顔を見合わせた。

二人の間に座る牛若丸は、どう見ても二人には男児にしか見えず、今までの生活を思い返してみても女児だという事が信じられないでいたのだ。

「間違いありませんね、牛若丸」

そう問われて牛若丸は、こくん、と一度だけ深く頷く。

それを見て絶句状態になっていた二人に、母は更に続けた。

「これには色々な訳があります。ですが今は理由は言いません、それは貴男達が大人になれば追々いずれわかる事……。そんな事よりも今は、貴方達三人が無事に育っていく事の方が先決です。だからいいですか、この事は絶対に他言無用。そして今若と乙若は、牛若丸を守っておやりなさい。兄として、男として……。これは母との絶対の約束です、わかりましたね？」

そう問われて、今若と乙若も、こくん、と一度だけ深く頷いた。

「良い子……。生きていれば、また必ずどこかで逢えましょう。そう、またいつか必ず……」

自分にも言い聞かすように、常盤は繰り返した。

そして、ぐっと拳を強く握ると、三人から離れて凜と背筋を伸ばして声を張り上げた。

「さあ、お行きなさい。走り出したなら、絶対に振り返るんじゃないよ」

バシン、と仔馬の尻を軽く叩くと、ヒヒンと鳴いてその場から走り出す。

「ははうえっ……!!」

「また、いつか必ず……!!」

「必ず逢いましょう!!」

馬の乾いた蹄の音を聞きながら、母常盤は走り去ってゆく三人の我が子の後姿を眺めた。

三人の兄弟は、振り返ってしまいたい衝動と溢れ出してしまいそうな涙を必死で堪えて寄り添う。

母の教え通り、三人は一度も振り替える事なく寺へと向かったのだ。

第十一話 兄弟と兄妹

母と別れた三人は、京の都を離れてから二度目の春を迎えていた。

四歳になった牛若丸は、寺の庭の雪がすっかりと解けた庭先に出て、清々しそうに空を見上げている。

緑色を取り戻した地面からはつくしん坊やフキノトウがそこら中から顔を出し始め、どこか草木の香りを運んでくる春風はまだ傷の癒えていない牛若丸にも優しく、そして暖かく頬を撫でてくれた。

「まあた笛を吹いておるのか、牛若」

庭中に鳴り響いていた、ピーピー、という不細工な音色を笑いながら、そこに現れたのは兄今若である。

地面に座り込んで笛を吹いていた牛若丸は、振り返って兄を見上げた。

「へったくそだなあ。折角和尚から貰ったのに、それじゃああげた和尚も可哀想だ」

「む……、じゃあ今若にいさん、ふいてみてください」

ケラケラと笑う今若を睨み付け、牛若丸は綺麗な漆塗りの横笛を差し出す。

「この戯け。粗野な俺にそんな繊細な芸当できるわけがなかるう。俺の自慢は有り余る体力とこの持ち前の明るさだけだからなあ」

「そうですね、今若にいさんは学もないですし……」

「何か言ったか？」

「いえ、何もいつてませんよ。……あ、そう言えばさいきん稽古付けてもらってなかったですよね？」

ニコリ笑って笛を懷に仕舞うと、すぐ横に置いていた木刀を手にスツと立ち上がった。

そしてもう一本の木刀を無理やり今若に持たせ、カン、と甲高い音を立ててぶつけ合わせる。

「は？」

「いざ、尋常にしようぶ！」

牛若丸が大きな声を張り上げると、近くの木に止まっていた鳥がびつくりして、バサツと急に飛び立っていった。

やれやれ、始まったか、と深い溜息をついた今若。

これが始まるとまた長い長い。

日が昇ってから暮れるまで続ける日もある程。

そして今はまだ昼前。

これはまずいなあ、どうにかして早めに切り上げないと体が持たん、
と思いながら剣を交える今若であった。

実は、牛若が男だと思っていた今若と乙若は、牛若が本当は女児だ

という事実を知って初めはどう接していいのかと悩んでいた。

が、当の本人は相も変わらずおぼつかない足取りで、「けんじゅつをおしえて」と、無邪気に二人に言うのだった。

顔や足を傷だらけにしながらも嬉しそうにそう訴える牛若の姿は、どこからどう見ても元氣な男児そのもの。

二人はそこで決意したのだ。

どんな事があっても、牛若の幸せの為に男として育て、女として守ってやるう、と。

そうしてすぐに元通りの兄弟に戻った。

兄二人の心中には多少の変化はあったにしろ、兄弟を守る、という想いは男だ女だなんて事はさして問題ではないのだから。

それに今となつては人に守られなくとも自分の身は自分で守れる程剣術や武術の腕前は上がっている上に、牛若本人もそんな事実をあまり気にはしていないようで、自分が男であろうが女であろうが特に変わりはないと考えているように見えていた。

暫く小気味のいい木と木のぶつかり合う音と、牛若丸の甲高い掛け声が庭に響く。

すると突然、今若の思いが通じたのか空はみるみる暗く淀み始め、ゴロゴロという雷鳴と共に雨が降り出した。

「おーっと、残念。これでは雨に濡れてしまいう上に雷に打たれるぞ。さあ、今日の所はこのへんで切り上げて中に入ろう。お前は笛の練習でもすればいい」

ホッとしたような笑顔を浮かべて、棒読みした台詞のように述べる
と、ほら来い、と今若がぶつきらばうに手を差し伸べる。
が、俯いたまま一行に動こうとしない牛若丸。

「おい、いい加減にしろ、この戯け。この雨じゃあ風邪をひいてしまうだろう。また明日相手してやるから、今日はもうお開きだ。わかったら行くぞ」

珍しく反抗的な牛若丸の細い腕を、グツ、と力強く強引に引くと、それを拒否するように牛若丸も強く引いた。

「嫌です」

「はあ？我儘を言っな、この戯け」

呆れ顔の今若に、悲しげな表情を浮かべて牛若は呟く。

「今若にいさん達はいいですよね、気楽で……」

今若が頭にかぶっていた白い布は雨に濡れ、ぺたりと肌に張り付いた。

「……はあ？突然何を言い出すんだお前。どういう意味だよ？」

それが気持ち悪くて、不快そうに剥ぎ取りながら問う。

「何もしなくても、にいさん達は男だから……。勝手に筋肉が付いて、勝手に力が強くなって、勝手に大きくなってゆくじゃないですか……」

「な、に？」

その言葉に、手に込めた力が緩んでしまった。

「私は……。私は、違います。私は、女だから……」

牛若丸の瞳には、焦りと当惑からくる悔しさが垣間見えていた。

「こうしている間にも何かをしなくては置いていかれてしまうんです。立派な男になる為に、強い男になる為に、人一倍がんばらなくてはと、心が、体が叫ぶのです。……母上と、あの日交わした約束を、私は必ず守らなければならないのです」

その表情は、今若にはとても辛そうに映った。

複雑な思いを胸に、ふう、と小さな溜息をついて、そんな牛若丸に今若は優しく微笑む。

「うん、そうだな。頑張って強くなろうな。でも、だ」

天を指して笑う今若。

「急いだって今日は生憎この酷い雨、お天道様も今日は休めと言ってるのさ。上から見ている父上も、たまには可愛い我が息子を甘やかしてやりたいんだろうよ。今日くらいはそれに素直に甘えたらど

うだ？」

と笑って、今度は優しく腕を引いた。

「な？だから、今日の所は中に入ろう。そこには雨に濡れてしまふ。風邪をひくぞ、牛若」

包み込むような兄の優しさに、子供染みた我儘を言ってしまった自分が恥ずかしくなった。

無論まだまだ幼い子供ではあるのだが、不甲斐無い自分に涙が出た。

「……ごめんなさい、今若にいさん」

「なあに、構わんさ。俺達は、兄妹、なんだから」

兄弟も兄妹も、同じ“きょうだい”という言葉。

違うのは漢字だけで、“きょうだい”には変わりないのだから。

そうですね、と笑う牛若丸の小さな体を急に担いだ今若。

「なな、なにをするのですか、急に？！じ、自分で歩けますっ！」

「ははは！たまにはいいだろう、俺にも兄らしい事させろ！」

嬉しそうに笑う今若は、肩に牛若丸を担いで歩き出す。

暖かい兄の優しさを肌で感じ、恥ずかしながらも嬉しくて笑みが零れた。

今日はこのぬくもりに素直に甘えよう、そう思った。

今日の雨は激しい中にも優しさを感じた雨だったから。

それから十年近く経った今。

「ああ、あつたあつた。確かにそんな事が遠い昔にあつたなあ。懐かしいぜ」

同じような雨空を眺めながら、鞍馬寺の中門の軒下で雨宿りしていた今若と牛若丸は笑っていた。

「結局その後二人で風邪をひいて、二日間くらい寝込んだんですね。その時の乙若兄さんの呆れ顔、今でも覚えていますよ」

「そうそう。看病してくれるのはいいが、グチグチグチグチうるっせえのなんの。アイツあ、今も昔もおせっかいな上に口うるせえ所は一切変わってねえからなあ」

「本当ですよ。見事な程に今若兄さんとは正反對」

柱にもたれ掛りながらクスクスと笑っている牛若丸。

「まあでも、それがアイツの良い所だからな」

今若がしみじみと言ったその言葉を聞いて、流石兄さんはわかっているなあ、と弟は感嘆していた。

適当に生きているように見えて、信念を持っているのが兄、今若と

いう男なのだ。

すると、突如何かを思い出したかのように、ポン、と手を叩いた今若。

「そうそう。そういえば俺が今回此処まで来たのも、牛若丸からの文だけじゃなく、珍しく乙若からも文をもらったからってのもあるんだぞ」

「乙若兄さんが、文を……？」

想像がつかなかった。

あの強情っ張りな乙若が、いつもライバル視していた兄今若に文を書くだなんて。

「して、それは一体どういった内容で??」

極自然と出たそんな疑問。

「お元気ですか、私は元気です。こちらの気候は……」だなんて、牛若丸の書くような他愛のない文面を、あの乙若が今若に対して書けるわけがない。
文を出したという事は、それ相応の“何か”があつたからに違いなかった。

「気になるか？」

得意げにこちらを見て薄く笑う今若に、こくり、とゆっくり頷いた牛若丸。

「ははは、まあそりゃあそうだよな。アイツが俺に文を出すだなんて、俺達にしちゃあ一大事だ。……まあでも、アイツが一生懸命になる事と言ったら一つしかなかろう」

「乙若兄さんが、一生懸命になる事……？」

それは一体なんだろう。

和歌……？お経……？悟り……？いや、どれも違う気がする。

というよりも、そんな事で今若に文を出す理由がない上に、二人の接点が一切見当たらないのだ。

うーん、と疑問符を浮かべて首を傾げている牛若丸を見て、呆れた様に吹き出した。

「この、戯けが。決まっておろつ、お前じゃ。お前」

「わ、私……ですか？？」

「そうだ、牛若の事だ」

乙若が一生懸命になる事、それが自分の事だと……？

牛若丸は今までの出来事を思い返してみて、そして、今日腕に怪我をして帰った時の取り乱した乙若を思い出して、ああそうかもしれない、と素直に思った。

「アイツはなあ、牛若。弟であるお前も、妹であるお前も、きつと可愛くて愛おしくて仕方がないのだ。だから口うるさくもなるし、人一倍心配もする。ほら、お前がここに移る事が決まった時にも、乙若は必至で自分も付いていくと志願しただろう？和尚達には『牛若丸には俺が必要なんだ』とかなんとか言っではいたが、ありゃあ

ただの言い訳だ。自分がただ単純に、お前の事が心配で心配で仕方なかったただけなんだろうなあ」

「……なんだか、そう言われると凄く恥ずかしいですね」

赤らめた頬をかきながら、下駄で地面にグリグリと穴を掘る牛若丸。その仕草からも照れ臭そうにしているのが把握できた。

「はっはっは！ 恥ずかしいくらいのブラコン、いや、シスコン兄貴だよなあ？……と。まあそれは冗談としても、だ。今回もらった文の内容に関しては、俺もちいとはかし気にかかる事があったんだよ」

急に真面目な表情に戻る今若。

笑っていたかと思うと真剣になったり、真情に話していたかと思うとふざけたり、この人は本当に何処までも自由奔放なのだあと冷静に牛若丸が思っている傍ら、思いつめたような表情で突然今若は問い掛けた。

「お前、男ができたんだって？」

「……お、おおおお、男？？！！」

あまりにも突然で突拍子のない発言に、流石の牛若丸も戸惑いを隠せなかった。

「ああ、いや別に？ 俺あ乙若みたいに断固反対ってわけじゃなくてだな？ ただ、了承するにも一度兄に紹介するのが筋じゃねえかな、

みたいな？まあでも、もしチャラついた戯けだった時にはフルボッコにするかもしれねえけど」

寛大な兄でありそんな言い回しをしてはいるが、ボキバキと拳を鳴らしているその態度と荒々しい言葉づかいからは、あまり寛大そうには聞こえないその台詞。

「ちょちょちょ、ちょっと待ってください今若兄さん！一体いつ、私に男ができたと報告が??」

「あー、確かひと月くらい前って書いてたっけかな。ほら、いつも夜に五条大橋の上で密会してるとかいっ」

「べ、弁慶の事ですか???!」

ああそうそう、と力なく答えた今若であったが、その答えに深い深い溜息を零した牛若丸であった。

「……まったく。乙若兄さんの早とちりもいい加減程々にしてもらいたいものです。いいですか今若兄さん、弁慶とはそういった深い関係ではありませんし、知人とか友人とかそういう類の仲間でもありません。一切何も関係ありませんから」

言い終えて、チクリと胸が痛んだ。

自分の放った今の言葉に棘があった事が、自分でもわかった。

「ふーん、そうか。でも、橋の上でしょっちゅう会っていて無関係という訳もあるまい。……ははあ、わかったぞ。さては何かあった

な。痴話喧嘩か？」

「だから、違いますって！！別に、なにもありませんから……」

それ以上は言いたくはなかったし、今は弁慶の事を思い出したくもなかった。

確かに出会い頭には決闘した間柄だし、その後も会えば毎回の様に決闘ばかり。

ただ自分は、面白そうな者と友になりたいと、正直に本心でそう思っただけだった。

友になる事は毎回の様に断られていたが、でも、昨日だけはまるで友の様に笑い合えていたはずだったのに……。

少しずつだけど歩み寄れている気がしていたのは、少しずつだけど分かり合えている気がしていたのは、自分だけだったのかもしれない。

そう思うと、ズキリ胸が痛んで苦しくなった。

「……まあ、なにもないのならそれはそれで俺達あ安心なんだが」

複雑そうな表情をしていた牛若丸からわざと視線を外した今若は、地面に座ったまま柱に寄りかかって言った。

「でも牛若丸よあ、俺がこう言うのもなんだが、若いうちは恋を沢山した方がいいぞー。俺なんてなあ、本命に浮気がばれて最近も平手打ち喰らったばっかだよ。女の勘ってなあ怖えくらいに当たるんだぜ？ま、それからというものの、毎日毎日ひたすら平謝り。今はな

んとか許してはもらつたがな」

ガハハ、と高笑いをする今若を苦笑いで見つめる牛若丸。

「本当に昔つから懲りませんねえ、今若兄さんは。でも私は大丈夫です。男にも女にも興味はありませんから。あ、それから。近々またその本命に平手打ちを喰らう予感がしますよ」

これも女の勘です、と舌を出す牛若丸を見て、また高らかに笑う今若は静かに胸をなでおろす。

良かった、あの頃の牛若丸と少しずつ変わってきているのだな、と。あの時雨の中で見た焦りの色を隠せない固い牛若丸と、今日の前で柔らかく笑っている牛若丸。

あの頃はまだ自分の進む道が定まらず、もがいてもがいて我武者羅に突き進んでいるように見えた。

それが兄の眼には見ていて痛々しく、危うく映っていたのだ。

それが今はどうだろう。

実に良い男に、そして良い女に育ってきている、そう実の兄妹ながらに思つた今若なのであった。

プロローグ（前書き）

検非違使が警笛を鳴らしていたかは不明です。その他様々な時代描写や風景など、分からない部分は若干イメージも入っております。もし間違っていたらすみません……見逃してください（笑）

プロローグ

夜になると、あれ程降り続いていた雨が嘘の様にあがっていた。庭先では夏を待ちきれない虫達が小さく泣き始め、心地好い夜風が吹いている。

夕食を終えた牛若丸は、京の町に出掛けると言って聞かない今若と、しょうがなしに案内役を引き受けた乙若を、先程送り出した所であった。

牛若丸は自分がまだ酒が飲めないという事を良い事に、イヤだイヤだと言う乙若をなんとか説得し、今若に付き添わせ町に向かわせたのだった。

それも、かなりの酒豪で荒くれ者である今若を一人で歩かせては何をしでかすかわからないという事と、帰り鞍馬寺まで無事にたどり着くかどうか心配だったという事もあつての事だ。

とは言つても、なんだかんだで仲のいい今若と乙若兄弟。

結局最後にはほろ酔い気分で肩を組みながら朝方帰って来る事くらい、牛若丸には容易に予想できた。

庭先で夜風に当たりながら夜空を見上げていた牛若丸。

「雨上がりは星がきれいに見えるなあ……つくし！」

小さなクシャミをした後、懷から漆塗りの横笛を取り出した。

「これはいいよ、本格的に風邪をひいてしまったかなあ？」

言って笑うと、その場で笛を吹き始める。

なぜだろう。

こうして空を仰ぎ見ながら笛を吹いていると、遠い所にいるはずの父上と母上がすぐ傍にいるような、そんな不思議な感覚に牛若丸は陥る。

それはただの錯覚なのかもしれないが、その不思議な感覚が牛若丸にとつてはとても心地がよいものだった。

笛を覚えたのは父と母と離れた後の事。

でも、なぜだか笛の音を聞いているととても懐かしい気分になるのだ。

それは、遠い遠い昔に、何処かで聞いた事があるような……。

その時、遠くで違う笛の音が聞こえて吹くのを止めた牛若丸。

「……なんだ？」

それは耳の奥を付くような、甲高くて嫌な笛の音。
検非違使の吹く警笛の音だ。

「やけに近いな」

鞍馬寺は鞍馬山の麓ふもとにあつて周りには何もない為、争い事や検非違使が来るような事はほとんどなかった。

牛若丸の胸がざわつく。

その笛の音は、不気味な程静かな寺院に響き渡っていた。

「何事もなければいいのだが……」

* * * * *

丁度同じ刻。

昼前に上手い事検非違使から逃れた武蔵坊弁慶は、鞍馬山付近にいた。

逃れたはずであつた検非違使からまた追われる形で、夜道を走っていたのだ。

「……つち、くそ！アイツらしつけえ！」

牛若丸が聞いていた警笛は、まさに弁慶を追っている検非違使が鳴らしている警笛。

「あー、うぜえ！俺が何したってんだよっ……！」

と言いつつも、度重なる程犯してきた今までの悪行が脳裏を過り、思い出してつい笑いが込み上げた。

「ああ、そういえば色々したんだっ たっけな。……って、色々あり過ぎてわっかんねえよ阿呆!!」

と、何やら一人ゴチャゴチャと言いながら、入り口でもなんでもない麓から乱暴に鞍馬山に入った。

警笛の音からすると、検非違使はかなり近くまで来ている。

弁慶はそのまま獣道でもなんでもない所を草木をかき分けてズンズンと山を登って行った。

「はあ、はあ……。まさか、こんな所までは追いかけてこれねえだろっ」

ふふん、と少しだけ安堵の表情を浮かべて後ろを振り返ると、煌々と光る二つの提灯が追いかけてきているのが見えた。

「?!……あんの阿呆共、一体どこまで追いかけてくるつもりだよ!」

舌打ちをして、また更にスピードを上げて上へ上へと登って行く弁慶。

その度にガシャガシャと武器や防具がぶつかる音が山に響く。登るにつれて傾斜もどんどん急になっていった。

「……はあ、……はあ、……アイツら、……諦めた、……みてえだな」

息も絶え絶え後ろを振り向いてみると、もうそこには提灯の灯りは見えなかった。

重たい武器の山を担いで、更に重たい防具を身に纏ったその男は、疲れ果てたようにその場にドサリと倒れこんだ。

「あー、もうダメだ！今日はここで野宿！決定！！」

そこで眠ってしまいたい程、足腰が立たない。

そのまま寝息をたててしまおうか、少し休んで野兎か何かを捕って腹ごしらえをしようか、と瞑想している時。

パキリ、という枝を踏みつける音がして、ガバッと弁慶は起き上がった。

「誰だ?!」

暗い。

目の前は真っ暗な闇。

薄らと木々の輪郭は見えてはいるが、光がない為にハッキリとは見る事ができない。

「誰かいるんだろう?!……出てこい!!」

答えない。

耳が痛くなる程な無音。

澄ましてみると微かに聞こえるのは小さな虫の声と、どこから流れ出ているであろう山水が流れる水音。

ゾワ、と背筋が痒くなる。

「いやいや、あはは、まさか。……幽霊、なわけねえって。なあ？」

一体誰に話しかけているのだろうか。

大きな体に似合わず、見えない何かにビクビクしている弁慶がそこにいた。

「おい、その鬼」

何処からか誰かに急に声をかけられて、弁慶の大きな体が飛び跳ねてしまう。

「だ、誰だ?!」

声からすると、かなり若い。

いや、若いというか、

「子供……?」

そう弁慶が呟いた時、ガサガサっという音と共に真上から何かが降ってきた。

「う、うわあつ!!?」

間抜けな声を出して尻餅をついてしまった弁慶は、必死で目の前に何が落ちてきたのか目を凝らす。

「お主、鬼か？」

暗闇の中ボンヤリと見える輪郭は、人のようだった。背丈は弁慶よりもやや低い。

「お、鬼だと？俺が??」

おそらく赤い鬼の面を見て言っているのだろう。

間近で見ても闇の中のせいで表情などは見えないも、頭や体がその身丈よりも全体的に小さく思える。

やはりそれは子供のように弁慶には見えた。

「お主、鬼にしてはやけに人間臭いのう」

そしてやはり、何度聞いてもその声はまだ声変りをしていない幼い男児の声に聞こえる。

「……一体誰なんだ、てめえは！ガキのくせして舐めた口聞きやがつてー!!」

「おお、臭い臭い。赤鬼よ、あまりまくし立ててしゃべるでない」

そう言つて嘲笑すると、手に持っていた何かをフワリと振りかざした。

「?!」

すると、辺りは急に日が昇ったかのようにパツと明るくなった。でもそれは半径五尺程の中だけで、すぐそこは先程と同じ闇。

「……て、てめえ一体、何者だ!？」

明るみに出て露わになったその幼い声の主。

その姿は、一尺程はあろうかという程齒の高い高下駄を履いた、黒い袈裟けさと黒い鈴懸すずかけの法衣ほつゐを身に纏う、見た目は十歳位の男児の子供である。

につこりと笑うその可愛らしい顔だけは大人びた言葉遣いと裏腹にやけにあどけなさが残っていた。

無造作に伸ばした髪は綺麗な程の銀髪で、頭には黒い頭巾とぎんを被っている。

「わらわに向かつて、何者か、じゃと？」

右手には金属でできた錫杖^{じやくぢやう}、左手には赤い葉団扇^{やだんせん}を持ちながらクツクツと笑うその子供。確かに見た目は子供なのだが、目に見えて普通の子供とは大きく違う点があつた。

「ならば逆に聞こうか。お主が踏み入れている此処……。此処が一体何処なのか、お主は存じておるのか？」

子供にしてはあまりにも妖艶に笑う、子供のような形をした銀色の瞳の、それ。

「はあ？ここがどこか、だと？てめえこそ、ガキのくせしてこんな時間にこんな山奥で何やってんだよ？！早く家に帰って小便して寝る、阿呆！！」

それは背に大きな黒い翼を携え、更にはいわく言い難い独特の氣のようなものを纏っている。

その氣は一見して神々しくもあり、魔物の様に禍々しくもあつた。

「くくく……、面白い。お主のような小童が、このわらわを、餓鬼と呼ぶか」

その者の存在自体が、人間ではない“何か”なのだという事は、ジ

ンワリと嫌な汗をかいている弁慶にも嫌という程感じさせていた。

第一話 それぞれの夜（前書き）

今まで書いたお話の文章など、読みやすいよう分かりやすいよう少しずつ直したりしています。が、まだ伝わりにくい部分などもあるかと思いますが……。でも、内容は一切変えておりません。それと、平安時代の描写の資料がなくなっていて、その時代にお店などがあつたのか実際の所は不明です。でも、自分的にはその時代からすでに色々なお店があつたなら嬉しいな、と思います。その方が活気があつていいですね。

第一話 それぞれの夜

牛若丸が鞍馬寺で胸騒ぎを感じ、弁慶が鞍馬山で何者かに出くわしていた丁度その頃。

京の町にある小さな酒処では。

「なあ？だーから言っただろうが、乙若。そもそもお前はいつも早とちり過ぎなんだって。考えてもみる、十四にもなつてまだ初心^ぶなままの牛若丸に、急においそれと男なんてできるわけがなからう。それにあんなお子ちゃまに色恋なんざ、五年、いや、十年は早いくらいだぞ、この戯^わけ」

向かい合つて座る乙若に対し勝ち誇つたように笑う今若は、並々と注がれた熱燗を一気に喉の奥へと流し込んだ。

「……つかー、うめえ！！やっぱ酒は燗に限るなあ！」

「いいや。まだそうとは言い切れないですよ、今若兄」

「あれ？乙若は冷酒派だったわけか？？」

「酒の話じゃなくて！牛若の話です！！」

ああ悪い悪い、と笑つて今若が催促するように空になったお猪口^{ちよこ}を乙若にズイツと差し出すと、納得のいかないような表情をしてそれに渋々と酒を注ぎ足す。

「さんきゅ。で、牛若がなんだって？」

「……はあ。まあいいや。で、ですね。なんとって最近の牛若の行動はおかし過ぎるわけなんですよ。ずっと吹いていなかった龍笛りゅうてきを突然吹き出すようになるわ、毎晩のようにそれはそれは楽しそうに何処かに出掛けてゆくわ、それに……」

ふーん、と、それを興味がなさそうにちびりちびりと酒を飲んで聞いていた今若に対し、突然乙若は興奮したように、ドンツ、と卓子たくしに拳を落として声を張り上げた。

「それに！それまではいつも傍に来て『乙若兄さん、乙若兄さん』とうるさい程だったというのに、ですよ？突然、あの武蔵坊弁慶とかいう輩が現れてからというもの、一切俺には興味が無くなったかのようにパツタリと顔を出さなくなつて、しかも……」

目の前でつらづらと述べる乙若の話を、頬杖をつきながらぼつと聞いている今若。

暫くの間黙つて聞いた後、静かに口を開いた。

「……なあ、乙若」

「なんですか？！まだ話は途中なんですけど？！」

「もしかしてお前、武蔵坊弁慶とやらに嫉妬しどしているんじゃないか？」

今若の的を得た問いに、ガシャンっ、と徳利をひっくり返し、それ

を慌てて片している乙若。

「しっ……嫉妬???」

「うむ。だつてそうだろう? お前からもらった文の内容と、昼間牛若と交わした会話の内容、それから今のお前の話から推測するとだぞ。牛若は弁慶という男に興味を持った、それで弁慶に近づいた、それは間違いなかるうな。だが。それが弁慶を男と意識しての行動かと言われれば、それは明瞭ではない。もしかすればアイツの性格からしても、本当にただ強い者と対峙してみたかっただけなのかもしれないしなあ」

「……う、うん」

確かにそうだった。

今までの牛若丸からしても剣術や武術には異様な程に興味を示していたし、強くなる事に対しては誰よりも執着していたところからすると、純粹に強そうな相手と戦ってみたかっかと考えるのが極自然だ。

「それを、弁慶が牛若の男だと、乙若はどうして言い切れる??」

「そ、それは……」

言葉に詰まる乙若を見て、プツ、と吹き出した今若。

「ほおらな、やっぱりそうだ。お前はただ、可愛い可愛い兄妹が得体のしれない男に興味を示しているという事が気に入らないだけなのだ。だから、なんだかんだ正当な理由をつけて仲を引き裂いてやりたいんだ。だが、それは浅はかな考えに過ぎんぞ。それに、誰が

どう見たってただの醜い嫉妬でしかないのだからな、乙若」

「ち、ちち違いますってば！」

「ははは、照れるな照れるな。確かに俺だってその気持ちはわかるぞ。どこぞの馬の骨とも知れん輩に、可愛い兄妹が傷つけられたり汚されたりするだなんて、兄としてそんな事見過ごせねえからなあ。相手の野郎をぶん殴ってやりたい気持ち、痛い程わかるぞー」

「ただ、だからあ！違いますって今若兄！！」

必死に訴えている乙若とは逆に、うんうん、と自分の中すでに納得してしまったように笑う今若は、手に持っているお猪口を乙若の顔の前まで持つていつて静かに述べた。

「でも、だ。そんな一方的なやり方じゃあ、可愛い兄妹に嫌われちまうぞ？」

ニツと笑ってまた一気にお猪口の酒を飲み干すと、ほら、と御酌を催促する今若であったが、納得がいかない様子の乙若は荒々しくお猪口に熱燗を注ぐ。

「わかりましたっ！では百歩譲って認めましょう、これは嫉妬だと！！」

「戯け、百歩譲らなくともそれは……」

「ですが！」

言わせないとでもいうように声を被せる乙若。

「牛若が武蔵坊弁慶とかいう馬鹿男に興味を持ったというのは紛れもない事実！例えアイツらの間柄が友人であれ宿敵であれ、今すぐでなくとも年頃の男女間には恋慕が付き物というもの！それは散々今まで遊んできた今若兄が一番わかっている事でしょう？！」

「……いい加減にしろ、この戯けが。さっきから声が大きいんだよ」
呆れた顔をした今若は静かにそう言って、不機嫌そうに足を組みながらゆっくりと酒を煽る。

一喝された乙若はやつと冷静さを取り戻し、シュンと小さくなった。

「す、すみません……今若兄のプライベートまで話に出してしまつて、お気を悪くされましたよね。つい興奮してしまいました……」

そんな乙若に小さな溜息をつく今若。

「……別に、俺やお前の話ならいくらでも出すがいいさ。だが、牛若の性別の話だけは声を荒立てて人様の前で話す内容じゃあないだろう。どこの誰が聞き耳たてているとも限らんのだからな」

という今若の低く静かな声に、ハツと我に返つたように動きを止めた乙若。

一度だけゆっくりと深く頷くと、手にしていた酒を一気に喉に流し込んだ。

そしてその後、今若にしか聞こえないような小さな声でゆっくりと問うたのだった。

「……だって。今若兄もそうは思いませんか。同性同士であれば、いくら憎き宿敵であつたとて尊敬できる程に相手が強ければ友人にもなれましょう。でもそれがもし異性同士であつたなら……？始め

は友人でも、後にその尊敬の意が違う方向に向いていきはしないでしょう。か。恋情とは、誰しも始まりはそんなところから始まるものではありませんか……？」

乙若の問いに答えず、無言のまま酒を飲んでいる今若に、更に続ける。

「俺は、牛若にはきちんとした男を、と思っっているんですよ。地位や名譽は別として、牛若を大事に想い絶対に傷つけたりしない誠実な男。……それがどうだろう、今日牛若は腕に酷い怪我をして帰ってきた。あれは間違いなく弁慶とかいう男の仕業に違いない」

キツと一瞬目を吊り上げた乙若は、ふう、と気持ちを落ちつける為一呼吸置いてから静かに笑った。

「だってそうだろう、今若兄。アイツは……牛若は、幼少の頃から人とは違う苦しみをずっと味わってきた。だから、女に戻れた時くらい人より何倍も幸せになってももらいたいじゃないか……いや、そうでなくてはいけないんだ」

切なそうな表情を浮かべて酒を煽る乙若を見て、暫く黙っていた今若はゆっくりと口を開く。

「あのなあ、乙若」

大きな溜息をついた今若は、まず飲み、と手に持ったままの空になった乙若のお猪口に並々と酒を注いだ。

「牛若だって、もう子供じゃねえ。自分の事くらい自分で決められるさ。それよりも、俺達の勝手な想いでアイツの人生を動かそうっ

て事の方がよっぽど不幸で可哀想な事なんじゃねえかなあ……と俺は思ってるんだが。どうだろう、違うかなあ乙若？」

静かに、そして優しく問い掛ける兄の言葉に、お猪口を持つ手に自然と力が入ってしまう。

「……その、通りです」

でも、と続けたい言葉までもを飲み干すように、グツと一気に酒を煽った乙若。

その姿を頬杖を付きながら見ていた今若は、フツ、と優しく微笑んだ。

「弟離れは寂しいよなあ、乙若。痛い程わかるぞー。俺だってな、お前らと離れて暮らす事になった時あ毎晩泣いたもんさ」

「泣いた?!今若兄が?!いや、ないない!今若兄に限って、それは絶対に、ない!」

顔の前で手をヒラヒラと左右に振る乙若を見て、ムツとした表情を浮かべる今若。

「なんだ……?俺が泣いちゃあおかしいってのか?」

「いや、だって。言わずと知れた荒くれ者で、陰では悪禅師とさえ呼ぶ者もいるという今若兄ですよ?母上と別れる時でさえ涙を流さなかった人が弟と別れるからって泣くだなんて……」

あり得ない、と断言して笑う乙若に対して不服そうにしている今若。

「俺だつて、母上と別れた時はだなあ……」
「あのお」

良い雰囲気の話がまとまりそうであつた二人に水を差すように、突然横から見知らぬ一人の中年男が声をかけてきた。

「ああ？」

二人の視線は同時にその男のにやけた顔に集中する。

「お話中すみませんね。もしかして坊さん方、鞍馬寺の牛若丸殿の身内の方で？」

「……は？」

血の気の多い今若は声をかけてきた中年男に睨みを利かせる。

「オッサンよお、他人様の話を盗み聞きたあ、随分と趣味が悪いんじゃないのか。ああ？」

「あ、いや。盗み聞きするつもりはなかったんですがね、ついそこまで聞こえてきちゃいました」

あはは、と中年男が誤魔化すように笑うと、椅子から立ち上がった今若も至近距離でその男に笑いかけた。

「ははははは、そうかあ。……で、だとしたら一体なんなんだ？文句でもあんのか？」

笑顔とは言つても目が一切笑つておらず、今にも殴りかかつてしまいそうな今若。

それを見て慌てた様に立った乙若は、今若に向かって宥め始めた。

「ま、まあまあ！今若兄も落ち着いて！一応俺ら寺の僧なわけだし、ほら、大きな声で話していた俺達も悪いんだから、ね？……とは言つても」

と付け足すと、乙若はくるりと逆に顔を向けて続ける。

「まあ確かに、俺らが牛若の身内だったらアンタに何か問題でもあるのかつて、俺も貴男に聞きたいところなんですがね？」

と、乙若が中年男に冷ややかな笑顔で問い掛けると、男は怯えた様に小さくなって慌てだした。

「いやいやいや！坊さん方、そんなに怖い顔しないでくださいよお！あつしはただね、この辺でこつこの書いている者で……」

そう言つて一枚の紙面を二人に手渡した。

「これは、号外……」

「お前さん、記者か？」

「へえ、そうなんですよ。で、それは今朝方町で配ったものなんですがね」

馴れ馴れしく今若の隣の席に腰を下ろした記者は、紙面のある部分を指差して言った。

「そこに載ってる事について、できればもう少し詳しくお聞かせ願いたいと思っております……」

そう言われて、渡された号外に無言のまま目を通す二人。

「いやあー、あつしも驚きましたよ、それを知った時には。何しろその時、そこに書いてあるように……って、痛っ！！い、イタイ痛い！！」

記者の腕を無表情のまま捻りあげているのは、今若ではなく、いつもであれば止めに入る役の乙若であった。

「……やっぱりお前、俺達にぶん殴られたらしいな」

「え、ええ???！何を言ってるんですか、あつしはただ……」

「おう、やれ乙若」

焦っている記者の横からそう声をかけた今若は、その様子を見ながらケラケラと笑って記者に問い掛けた。

「一発くらいどうってこたあねえさ。そもそも、そんなもん書いて俺達に見せる事自体殴られたくて仕方ありませんってアピールなんだと思うんだよ。なあ、そうなんだろう?」

「ち、違……」

「なに。アンタ、マゾなの?」

「ちち、違っつてば……」

「ああ、たぶんな。だからさっさとやっちまおうぜ」

「だ、だから、違いますって、あっしは……」

「ああ、でも。ここじゃあ店に迷惑かかるから表に出ようか」

「え、えええ?!」

「そうだな。おい、お勘定頼むー。コイツが全額払うそうだからさあ」

「ち、ちよつとちよつと?!」

記者の必死な訴えも虚しく、勘定を支払われた後、にっこりと微笑む僧らしくない僧二人組に首根っこを掴まれて店の外へと出て行くのだった。

第二話 二つの提灯

輝く水面の横、佇む一人の美しき青年の姿。

そして美しき笛の旋律が緑多き辺りに流れ、まるでそこだけ時間がゆったりと流れているかのような錯覚に陥ってしまう。

鞍馬寺の庭では、牛若丸が夜空を見上げながら時を忘れて横笛を吹いていた。

その時、ふと人の気配を感じて音色を止める。

「誰か来た……。こんな時間に？」

笛を懷に仕舞い、人の気配がする方へと足を運ぶ。

この時間はすでに慧新和尚や他の年寄りた僧達はいつも深い眠りについていて、起きているのは牛若と乙若位であった。

が、乙若は現在遙々遠方から訪ねてきてくれた実の兄、今若と町に出掛けていていない為、寺の中で起きている人物は牛若丸一人だけ。不審に思い歩を進めながら、腰に引っさげた父の形見にソツと触れる。

「昨日弁慶がコレを受け取らないでくれたおかげで、もしかして今救われるかもしれんな……」

気配を追って行き着いた場所は、仁王門の前。
そこには提灯を持つ二つの影があった。

「其処の人、こんな時刻にこの寺に何か用ですか？」

牛若が少し離れた先にいたその者達に声をかけると、二つの影はそれに気が付きゆっくりとその歩をこちらに向ける。

ゆらゆらと近づいてくる、辺りを照らす二つの灯り。

それがすぐ目の前まで来たところで、大人の男の低い声が響いた。

「夜分すまない、我らは京の天皇に仕える検非違使の者なのだが……」

頭に三角烏帽子を被り立派な紺色の着物を纏った二人の男。

提灯の明かりで照らされた二人の検非違使は、やはりどこか一般の者と違った品のある風格を醸し出していた。

「検非違使の方……？もしかして、一刻程前に警笛を鳴らされていたのは貴官方ですか？」

牛若丸は、少し前にすぐ近くで鳴り響いていた警笛の嫌な音を思い出していた。

「ああ、そうだ」

「逃げていた罪人を追っかけていな」

「罪人、ですか。珍しいですね。この辺はいつも長閑で平和な場所なのですが」

そんな場所に突然検非違使と罪人が現れたという事に違和感を覚えた牛若丸は、ふむ、と腕組みをして考え込んだ。

「はて、その者は一体如何様な罪を？」

なんとなしにそんな疑問を投げかけた。

すると二人の検非違使は顔を見合わせた後、一人が重たい口をゆつくりと開く。

「播磨にある書写山圓教寺の堂塔を炎上させた罪だ」

「な、なんと、あの立派な寺院を……？」

書写山圓教寺といえば、皇族や貴族の信仰も篤く天皇や法皇も多く訪れる名のある大きな寺院。

そんな格の高い寺を炎上させるだなんて、とんだうつけ者だな、と牛若丸も呆れる。

「まあでも。燃えている事にすぐさま気が付いたのが幸いとなり大事には至らなんだがな」

「とは言え、柱など数か所が黒焦げになってしまった。神聖なる場所が汚されたとあつて天皇がお怒りなのだ」

「そりゃあそうでしょうね。天皇だけではなく、寺に仕えている者達の怒りも相当なものでしょう。寺を燃やしてしまおうだなんて、そんな不逞な事を考え付く輩がこの世にはいるんですねえ」

呆れ果てた様に言い捨てる牛若丸に対し、検非違使の二人は更に言葉が続けた。

「それに加えて、逃げている道中、人を何人も斬っている」

「な、なんですって？」

「その数、ざっと数えてみても八百は超えようか……いや、九百であつたかな」

「いや、もう千人近いぞ」

「そ、そんなに……？」

と、青ざめた表情を浮かべた牛若丸に対し、一人の男が言った。

「牛若丸、驚いている処悪いが、それはそなたもよく知っている人物であるぞ」

その言葉にピタリと動きが止まり、少し間をおいてから口を開く。

「……まさか、弁慶の事か？」

そういえば弁慶は京の武将達から千の帯刀を奪って歩いているのであつたと思ひ出す。

だが、書写山圓教寺を焼いた事は勿論知らなかった。

そして、牛若丸はとても大事な事を忘れていたのだと、この時初めて気付かされる。

「そうだ。武蔵坊弁慶の悪行のせいで生死を彷徨っている者達が、この京には大勢いる」

そうなのだ。

武将を倒すという事は、つまりはそういう事。

殺し合いという対峙になるのだという事を、牛若丸は忘れていた。

「弁慶の手によってそんなに大勢の方が亡くなられたのですか……」

眉を顰め苦渋に満ちた表情を浮かべる牛若丸。

どうしてそんな事を……？」

今更になってそんな疑問が湧きおこる。

そしてどうしてそれを止める事ができなかったのか、どうしてもつと話を聞いてやれなかったのか、という自分の行動に対し悔やんでも悔やみきれない後悔が生まれた。

でも、止めるにしろ話を聞くにしろ、どちらにせよ遅すぎたのだ。

牛若丸は知らないが、出会った頃にはすでに九百九十九本目の帯刀を集め終わっていた弁慶。

その運命は神や仏以外、誰にも変える事はできないのだから。

「いや、死人はまだ出てはいない」

「え……？」

一人の検非違使の言葉に、牛若丸は目を丸くさせた。

「確かに大怪我を負って生死を彷徨ってる者もいるが、医師の話だとその多くの者達は峠も越え大事には至らないであろうという話だ」

「奇跡だよな、千人近い者と対峙して死人を出さずにいるだなんて」

「そ、それは本当ですか？」

「ああ、皆だいが派手にやられてはいるがな」

そんな二人の男の言葉に、軽率ながらも小さく口角を上げて微笑んでしまった牛若丸は思う。

やっぱりアイツは悪い奴ではない、相当な変わり者ではあるが、とあれ程の剛力の持ち主、いくら名のある武将であってもあの大きな得物と大きな体を持つてして相手を死に至らしめる事なんて容易い事だったはず。

それはおそらく、弁慶がわざと相手の致命傷を避けて戦ったからだという事を物語っていた。

あくまでも弁慶の目的は殺傷ではなく、決闘して相手を負かし、最後にその者の帯刀を奪う、ただそれだけなのだ。

その事にどんな意味があるのかは牛若丸にも目の前の検非違使達にも勿論知る由もないのだが、それは一月あまりも対峙してきた牛若丸本人が誰よりも肌で感じわかつている事なのだから。

「だが、どうであれ弁慶が罪人という事実には変わりはない」

その言葉に一瞬だけ柔らかくなっていたその場の空気がピンとまた張り詰める。

「それに、今朝もそなたに切りかかっていたであろう？」

「それが武蔵坊弁慶が凶暴だという、何よりの証拠」

一瞬とは言え柔らかい表情になっていた牛若丸は、瞬時にしてその時の事を思い出し顔がこわばる。

「いや。でもあれは……」

そう言いかけたところで、検非違使は一枚の紙面を牛若丸に手渡す。

「これを見てみなさい」

「これは……？」

そこにはこう記されていた。

『悪鬼、武蔵坊弁慶と夜な夜な密かに通じる仲間がいた！それは、鞍馬寺に仕える牛若丸という少年！』

「な、なんだこれは……」

その記事は真実も虚偽もまるで面白おかしく何かの物語の様に書き綴られており、内容からすると弁慶と牛若丸は実は内通する仲間で、書写山圓教寺を焼いた謎についても牛若丸が関与しているのではないかという浅はかな推測のオマケ付で締めくくられていた。

「この寺に来た頃からそなたを知っておるのだ、我らもわかっておる。それが事実無根だという事くらいはな」

「そもそもそれを書いている記者というのは、いつもいつも事実をひん曲げて面白おかしく書く輩でな。こちらとしてもほとほと困り果てておるのだ」

まあでも、町の者でそれを楽しみにしている者も少なくないからな、と最後の言葉を濁す二人。

「弁慶……」

そう一言だけ呟いて号外を手に震えている牛若丸に対し、同情の意を見せる検非違使の男。

「大丈夫だぞ、そなたに関して特になんの御触れも出てはいない」
「うむ、逆に武蔵坊弁慶に怪我までさせられたのだからな」

「違う、違う……。そうではない」

牛若丸はブツブツと独り言のように呟く。
この時、初めて弁慶の意としていた事がわかり驚愕としていた牛若丸。

「大丈夫か、牛若丸？」

顔色の悪い牛若丸に気が付き、検非違使達ももう今日の所は帰ろうと気にかけて始めた。

「突然の訪問、申し訳なかったな。もう夜も遅い、怪我もしたのだし今日はもうゆっくりと休め」

「ただ、この辺まで武蔵坊弁慶が逃げてきたのは確かだ。何かあればすぐ我らに知らせるように」

そう言い終えると、二人の検非違使の持つ灯りはゆらりゆらりと石段を下って行って、最後には見えなくなった。

それをぼうつと後ろから眺めていた牛若丸は、闇夜の下様々な思いを胸に、ただその場に立ちすくんでいた。

第三話 招かれざる客人（前書き）

先程見たニュースで、今年の流行語大賞の候補に『絆』という言葉がありました。なんと偶然。それからこの言葉、東日本大震災にちなんでの言葉だそう。そういう私も、東日本大震災の津波で被災しました。これもまた偶然なのでしょうか。

第三話 招かれざる客人

鞍馬山の奥深く、暗闇の中の険しい斜面上に揺れる大きな影と小さな影。

月の光も届かない程高い木々に囲まれた真夜中の山中。

普段なら、その刻その辺りには影なんてものは存在し得ない。

なぜなら、影は光りあって存在し得るもの。

今現在其処に立っている二人に影が差したのには、あるひとつの理由がある。

「くくく……、面白い。お主のような小童が、このわらわを、餓鬼と呼ぶか」

そういつて妖艶に笑う、小さな影の上に立つ少年。

その少年が放った光が二人を取り囲むようにして辺りを照らし出していたからだった。

そしてゆらりと揺れる大きな影もまた、笑う。

「小童だと……？つはは、笑わせてくれるじゃねえか。てめえこそ俺から見たら小便臭えクソガキにしか見えねえがな」

そう言つて怒りを露わにしている大きな影の本体、弁慶であつたが、額ににじむ嫌な汗を隠しきれず、グイツと袖で拭う。

流石の弁慶も肌で感じているのだ。

目の前に立っている小さな少年を、コイツは只者ではない、と。

「鬼よ、一体お主は何に恐れておるのだ？」

少年は大きな図体をした弁慶に臆する事無く、笑顔を崩さずにそう問う。

「っは、恐れる……？この俺様が？」

「ああ、強がついててもわらわにはわかるぞ。そうだのう、まず、素性の知れないこのわらわに、そして……自分自身の過去に、といったところか？」

まるですべてを見透かしているかのような鋭い少年の察知力に一瞬顔をこわばらせた弁慶であつたが、すぐに表情を緩めてケタケタと笑い出した。

「てめえは阿呆だな。俺は何にも臆しちやいねえ。ただ、てめえから感じる得も言えぬ気配が気味悪いだけよ」

確かにその少年から発されている氣のようなものは禍々しくなんとも不気味。

しかも、こんな時刻にこんな山奥で幼い少年がいるというだけでもとても異様だというのに、その少年の身に纏う服は全身黒の法衣、その上髪は綺麗な銀色で薄く微笑む瞳も同じ銀色の光を放っている。それはとても気味の悪い光景なのであつた。

「てめえがどんな術使いかは知らねえが、いい加減この気配なんとかしやがれ。寒気が止まらねえ」

「ほう……。お主、わらわが殺気を放っていると解るか？」

「殺気……？この薄気味悪い感じ、これがお前の放つただの殺気だと？」

「そうだ。野生の動物達は自分の縄張りに入られたら威嚇するであろう？それと全く同じ事を、今わらわがお主にしておるだけの事。」

……わかったら、此処を去れ」

「っ?!」

急に先程とは比べものにならない程の嫌な気配、フツフツと額に滲む脂汗。

全身からは滝の様に冷や汗が吹き出し、剣山を全身で受け止めたような感覚を体中で感じる。

悪寒と共に吐き気まで催してしまう程の状態の弁慶は、たまらず体制を崩し片膝を地面に付いてしまった。

「……て、てめえ。一体今俺に何をした……？これは、なんという術だ？まさかてめえ、陰陽に仕える者か？」

あまりの氣の強さに、意識が朦朧としてゆく頭を抱え込む弁慶が、クラクラと眩む視界には左手に持っていた赤い葉団扇やこでで口元を隠して、さも可笑しそうにクスクスと笑っている少年が映った。

「これこれ。その質問、すべてが的外れであるぞ。わかっているよ。うで全くわかっておらんようだなあ。だが鬼、お主は面白い奴よ。う。普通の人間は殺気を浴びたと気が付かない上に、この氣を一度浴びただけでも次の日の朝まで氣を失ってしまう程だというのに。お主、赤鬼にしては実においしい器じゃ」

嘲笑するように笑っている少年に苛立ちを隠せない弁慶は声を荒げる。

「つるせえ……！言っておくが、俺あ鬼じゃねえ！」

「知っておるわい。お主は鬼の面を被ったただの頓馬とんまな人間である」

「と、頓馬だと……？」

「そんな頓馬な人間風情が、こんな所に一体何用だ？」

「っ……?!」

ギロリ、と銀色の瞳に射られる。

弁慶はまるで野生の獣に睨まれたかのような鋭い眼光に一瞬たじろぎ、威勢を張ったにも関わらず柄にもなくそのまま何も返せず言葉を失ってしまっていた。

「……ふん。まあ、答えなくともいいわ。わらわにはお主が誰なのか、どうして此処に来たのかくらいわかっておるのだからな」

ごくり、と生唾を飲む音が聞こえてしまいそうな程辺りは静かで、片膝を付いたまま身動きができないでいる。

弁慶は、久しぶりに恐怖というものを味わっていた。

「それから、わらわは術使いでもないし陰陽道にも通じておらん。わらわはただのしがな鞍馬山の守り神よ」

「守り神……だと？つはは、まあたこのクソガキ、ふざけた事を……」

ガクガクと震える膝に気合を入れるように、グツ、と手を添えて立ち上がるうとした弁慶であつたが、少年は右手に持っていた金属製の錫杖しやくじやうの先を弁慶の脳天に軽く押し付けた。

「そうじゃ、わらわは此処を守っている神。そして、お主は其処に現れた招かれざる客人、といったところか」

「つく……！」

立ち上がるうとも頭上から錫杖で押さえつけられていてまったく起き上がれない。

おかしい、大力無双で知られるこの俺が？剛力な自分の力が、この体の小さな少年の力に劣るというのか？

様々な疑問を思い浮かべる弁慶は、何もできない歯がゆさから目の前で笑う少年を睨み付けた。

「おお怖い怖い。赤鬼よ、そう睨むな。お主は人間なのだからな、天狗であるわらわに敵う筈がなかるう。……そういえばお主、聞いた事はないのか？鞍馬山くらまさんにいる“鞍馬天狗”という存在を」

「天狗……？つは、阿呆。俺だって天狗くらい知っている。そんな妖怪が、まさかお前だとも言うのか？」

そんなわけないだろう、と鼻で笑う弁慶。

天狗という妖怪染みた存在にしては、少年はあまりにも人間らしい上にあどけなさ過ぎる。

確かに銀色の髪と瞳、背の翼は異様ではあるが、それが本物かどうか

かも疑わしい。

それはもう、荒唐無稽としか弁慶には思えない。
否、思いたくはなかったのだ。

「可笑しいか？……でも、お主の目の前にいるわらわこそが、その天狗なのだ」

「は……？マジか？？だつてお前、天狗と言つたらもつとこつ……」

弁慶はピンときていなかった。

無論理由は、目の前に存在する生き物は想像していた天狗とは全く異なるものであったから。

「まあ、言わんとしている事はわかるぞ。本来天狗というものは顔が赤く、長い鼻をしていると、そう言いたいのであろう？」

「え、違ふのか？」

「お主の目は節穴か？わらわを見ろ、そんな不細工な容姿をしているか？」

失礼な奴じゃ、と頬を膨らます鞍馬天狗は、どこからどうみても幼い少年そのもの。

腑に落ちないという表情を浮かべる弁慶に対し、少年はやれやれと更に説明を加えた。

「それは勝手に人間達の間で広まつた噂に過ぎん。天狗というものは本来、見た目は人間の童男どうなんの容姿をしているのじゃ。人間と違う所と言えば、この銀色の頭髮と瞳子どうし、それから背に生えた黒い翼くらのもの。まあ、そこそこの山を守る為にそれなりの魔力も持ち

合わせてはいるが、普段はそうそう使う事もない」

「さっきの薄気味悪い感じ、あれがその魔力とかいうやつか……」

そう言つて、弁慶はさっきまで充満していた具合が悪くなる程の氣がなくなっている事に氣が付く。

「ああ、あれは違う。あれはただの殺氣じゃ。お主を殺す、という強い念を込めただけの事」

もうその殺氣は抑えているようで、余韻でまだ小さく震える膝を抱えながらゆっくりと立ち上がった弁慶。

「へ、へえ。たつたそんだけで俺はあんなに……」

あまりに桁違いの力量に、弁慶は苦笑いが零れてしまう。

でもそれも仕方がない事、しがない一人の人間と魔力を持つ山の守り神の天狗では、戦わずともその差は歴然だという事くらいは誰しもが知っている事なのだから。

「それからもうひとつ。人間達の知る天狗の、赤い顔をした鼻の長い顔、あれはただの面じゃ。それ、丁度お主の被っているそれと同じでな」

そう言つて弁慶の被っている赤い鬼の面を錫杖で指す。

「わらわ達天狗は見た目はこのように可愛らしからう？ どうしても人間達に舐められてしまうというのでな、一時期天狗の間でその面が大層流行ったのじゃ」

「いや、その前に、今自分の事可愛いつて……」

「山中で悪さをしている輩を見つけても、できることならこちらとしては戦わずして去ってほしいのが本心でな」

少年は弁慶の言葉を気にする事なく更に続ける。

「が、人間達はわらわ達の姿を見ても一切怖がる事もない上に、逆に山の神であるわらわ達にかかってくる始末。仕方なしに一時その流行に乗っかって、わらわもその滑稽な面を付けた頃もあった。……だが、ある時気が付いたのだ、この面は物凄く、ダサイ、と」

「ダ、ダサイ??」

そういう問題か、と突っ込みを入れたかった弁慶であったが、その前に思う事があった。

世間一般に知られている天狗の顔が、面だった?

いや、その前に目の前の少年が、本当に天狗なのか?

でも、目の前の少年、否、天狗はそう述べている。

弁慶は夢でも見ているのだろうかと思いを疑った。

自らの頬を平手で叩いてみるも、やはり痛い。

「……まさか。本当にてめえ、この鞍馬山に住む天狗なのか……?」

弁慶の言葉に妖艶に笑う少年。

刹那、バサツと背の黒い翼を羽ばたかせ、宙に浮いた。

「だから。そうじゃと先程から申しておる」

その姿はまさに妖怪か、魔物、もしくは神のような存在そのもので、この時弁慶は確信した。

目の前に存在する少年は、紛れもない鞍馬天狗なのだ。
そして、人間である自分がどうあがいてもかなうはずのない相手なのだと。

その時、突如遠くから聞きなれた笛の音が聞こえてきた。

「こ、この音は……」

その音色は、忘れもしない、間違いなく牛若丸の吹く竜笛の音色。
そういえば牛若丸は鞍馬寺に仕えているのだったな、そう思い出した弁慶は、落ち着かない様子で辺りをキョロキョロとしていた。
すると、少し高い位置に生えていた木の枝に舞い降りた鞍馬天狗が
呟く。

「クス……牛若丸め。何か良い事でもあったな」

薄く笑って、木々の間から遠くに見える寺院の屋根を眺める鞍馬天狗に、弁慶がすかさず問い掛けた。

「まさかお前、牛若丸と知り合いなのか……？」

「そういうお主も、牛若丸と知り合いだったのか？」

「あ、……知り合いと言うかなんというか……」

言葉を濁す弁慶を、クス、と笑って鞍馬天狗は答える。

「まあ、お主たちの間に何があったのかは聞かんでおこつ。わらわ

と牛若丸は知り合いもなにも、牛若丸が鞍馬寺に来た当初からの数少ない友人の一人じゃ」

「ゆ、友人？だと?!」

遠くに聞こえる美しい旋律を聴きながら弁慶は思う。

牛若丸は悪漢と呼ばれたこの俺と友になりたいなどと言う随分と可笑しい奴だとは思ってはいたが、まさか鞍馬山の天狗とまで友になつていたとは……。

人の事を言えた義理ではないが、あまりの異色ぶりを放つ牛若丸に暫し呆気にとられてしまう弁慶なのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4092y/>

K I Z U N A ～源平合戦～

2011年12月1日23時00分発行